

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

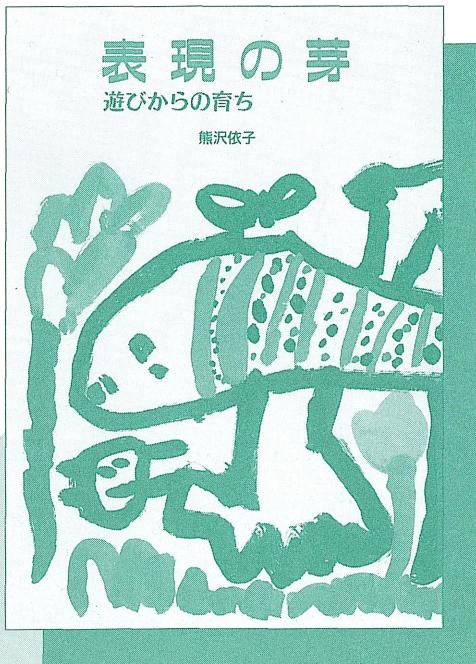
1990—
8



第89巻 第8号 日本幼稚園協会

表現の芽

遊びからの育ち



子どものさまざまな『表現』の姿と保育者の役割についての実践報告

- ★『創造の仕事』としての保育をめざす保育者のための実践ガイド。
- ★写真と実践レポートで、子どもたちの『表現』活動の多様な姿を述べているので、これから保育の指針として役立ちます。
- ★『保育専科』で一年間連載し好評だった「生活から生まれた造形」に新たに事例を加えて一冊にまとめたもの。

熊沢依子・著

B5判・136頁・定価1,800円（本体1,748円）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーフックの

フレーベル館

幼児の教育



第89巻 第8号

幼児の教育 目次

—— 第八十九卷 第八号 ——

© 1990
日本幼稚園協会

顔 津守 真 (4)

保育の いざみをくむ

——堀合文子先生に伺う 堀合 文子・田中三保子

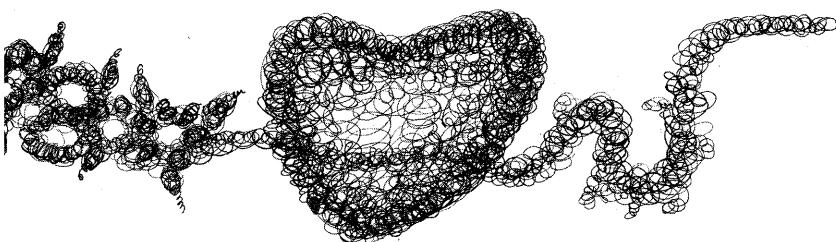
上坂元絵里・嶺村 法子 (9)

特集・緑蔭図書紹介

『母親!』『近代家族とフェミニズム』他一冊 江原由美子 (20)

『倉橋惣三「保育法」講義録』他二冊 村石京 (23)

『グリム童話』——子どもに聞かせてよいか? 寺崎 弘昭 (27)



『ミッドナイト・コール』『死を考える』 中村 弓子... (31)

『ウィリアム・モ里斯伝』 皆川美恵子... (34)

『雪の夜に語りつぐ』 近藤伊津子... (38)

『フェミニズム論争』『アグネス論争を読む』他五冊 宮坂 寿子... (42)

言語障害の臨床研究ノート(3)

言語発達に関与する要因——口蓋裂を通して 村上 敏子... (47)

心が育つということ その(2)

幼児の持つ「内—外」意識の変容をめぐって 豊田 一秀... (54)

表紙イラスト・林 健造

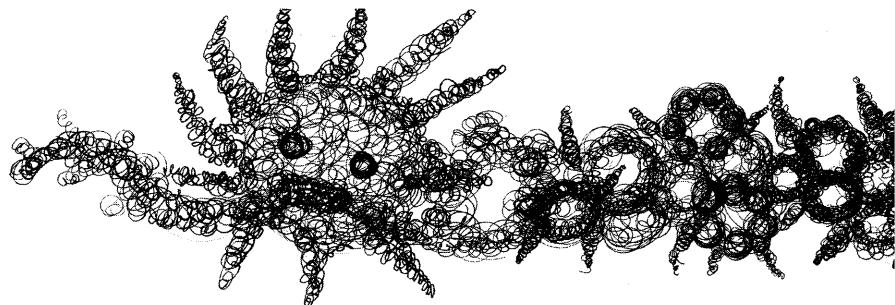
扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

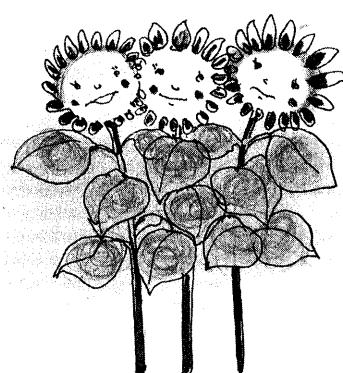
編集委員・本田 和子／豊田 一秀・上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



顔

津守 真



子どもがある行為をどのような気持ちでやっているかを保育の中で感じることは比較的容易であるが、それが子どもの心の深いところにある疑問や願望と結びついていることに気が付くのは、ある条件に恵まれたときである。保育の積み重ねの中で洞察がえられることもあるし、また、違う子どもの類似の場合の省察がそれを助けることもある。

お化けごっこ遊び

五歳のH男は若い実習生に抱かれて走り回りながら、私に「お化けやつて」と頼んだ。そのころH男は、大人が頭に布をかぶつて追いかけるとキッキヤと笑つて逃げる遊びを好んでいたので、私も顔を手で蔽つて「お化けだぞー」というと大声をあげて逃げた。子どもはそれを半分こわがりながら楽しんでいるのがわかるので、何度もくり返した。

それをしながら私は、この子にとって周囲の人々はお化けのように不可解な存在なのではないかと気が付いた。つまり他人の同一性（アイデンティティ）、ひいては自分の同一性への疑問である。そこで私はお化けを演じながら、私の顔をはつきり見せ、お化けは私であることを確認するように試みた。

H男は普通の幼稚園にいっているが、いくらか発達も遅れており言語も不明瞭なので、他の子どもたちの中に入つてゆけず、指をくわえて傍観していることが多いという。きっと周囲で起こっていることを理解できないでいるのだろう。大人たちは親切で優しい反面、能力をこえたことを要求し激励するので、自分にとつて大人とは何であるのかも不可解なのだろう。この子どものこういう生活環境を考えると、力相応のことを期待し承認してくれる大人の存在の必要性を感じさせられ、この数か月間私共はこの子と丁寧につき合うよう心がけてきた。いま、この子にとって、周囲の人々は不可解ではなくて理解しうる存在になりつつあり、そのことがお化けごっここの遊びを生み出しているのだろう。

私はこの子とお化けごっこをしながら、かつて私の顔にえのぐを塗つてよろこんだ何人かの子どものことと思い出した。そのときには意味はよく分からなかつたが、その子たちと私との間でたいせつなことが行われているように感じられ、私はそれを思い切つて受けてたのしんだ。この人は自分らしく行動するのを助けてくれるのだということを確かめつつ、この子どもたちは私の顔にえのぐを塗つていたのだと思う。「顔」についての保育体験が、このお化けごっここの理解を助けてくれた。

H男との間のお化けごっこは、それ以来、次第に切迫感を減少させていった。二週間ほど経った日、いつも親しんでいる実習生に抱かれていたH男は、私を見ると身を乗り出し、真正面から私の顔をしげしげと見つめて、「これだーれ？」とたずねた。何度も遊んだことのある私を知らないはずはないのに、お化けではない私をあらためて知り直すことが必要なのだろう。そしてその日はお化けごっここの遊びにはならなかつた。

顔とアイデンティティ——エリクソンの考察

顔がだれの顔だか分からぬことは、自己同一性（アイデンティティ）の混乱にその基盤があることを、エリク・H・エリクソンはその著「責任と洞察」の中で考察している。彼はひとりの青年の「顔」の夢について語り、それが幼年期から現在に至る各時期のアイデンティティの問題と関連している」と述べる。その夢は次のようである。

「幌馬車時代の馬車に大きな顔が座っている。その顔には目も鼻もなく、のっぺらぼうである。顔のまわりには恐ろしい蛇のような髪の毛が巻きついている。その顔は母親ではないかと思うがたしかではない。」エリクソンは青年が自由に語りうる関係をつくる間に、顔のテーマが何度もくり返され、それが自我の形成に重要な意味をもつことに気付く。

青年の幼児期の記憶の中には、母親の優しく美しい顔が、あるとき強い感情のために歪んで見えたことが印象づけられている。子どもの一寸した反抗にも母親は度を失つた。母親との関係の中で、どれだけ主体性を主張してよいのか分からぬ、幼児期のアイデンティティの問題がここにかくされて

いる。

少年期に、この青年は農場をもつていた祖父を深く尊敬し、頼りに思っていた。話が米国中西部の幌馬車時代に及ぶと、彼の語調は詩的で感傷的になつた。青年期に祖父の死の直前、彼は祖父に反抗した。夢の中の顔は祖父の顔かも知れない。彼は自分の未来を、祖父のような知恵深い確固としたアイデンティティの上に築きたいと願つてゐる。しかし彼の反抗がそれを破壊してしまつたのではない、かと恐れている。

この青年は神学生である。しかし職業を考えるとき、彼はそのことに疑いを感じ、そうすると精神的にも不安定になつてしまふ。夢の中の顔は神の顔かも知れない。

更に重要なことは、エリクソンに夢を語る青年との眼前の関係が指摘される点である。彼の白髪は顔のまわりに巻きついていたれの印象にも残りやすい。この「顔」はエリクソン自身の顔ではないかと彼は考える。この心理相談の期間に彼は手術を受けることになつてゐた。関係はいつ中断されるかもしれない。繊細な神経の青年にとって、このことは不安感を抱かせたであろう。「この人は何をおいても私のことを本気に考えてくれる人なのか、あるいは仕事として面倒をみててくれるだけなのではないか」と、青年は相談者に対する不信を暗示した。このことは、人間のことを専門とする者に共通に投げかけられる厳しい問いである。夢中の「顔」は、関係の持続性に関する問い合わせた。

このような問いに直面して、相談者が、相手の分までも責任を引き受けることは不可能である。相談者は母親や祖父の代理をすることはできないし、神の立場を演じて本人の責任を代わって負うこと

もできない。そのことを認識しつつ、相手の行為を通して、その背後にある悩みや願望、基本的態度を洞察し、それに応答して新たな関係をつくり上げてゆくことが専門家のできることである。

エリクソンはこのはなしを臨床における解釈の妥当性についての論文の中で述べている。それは科学的研究における正答とは違い、相手が更に生きづける希望をもつてその場を立ち去るかどうかが、解釈の妥当性のきめ手になると言う。この点は保育においても同様である。

私が顔の意味に気が付いてお化けごっここの遊びをした日、H男は時間になつても帰ろうとしなかつた。そして最後に、私を腰につかまらせ、自分が先頭に立つて電車になり、スピードで走り回った。私を後に従えて走る。恐れや不安のもとである男性（多分父親だと思うが、これについてはここでは触れなかつた）をひきつれて走る。これをしなければ一日は完結しなかつたみたいである。

ひとつのことの理解がつくられかけた時には、子どもは次の舞台に足をかけており、保育者は新たな課題にさらされる。保育の実践は立ち止まる暇なく進行する。この次に「顔」の遊びに出会うとき、私はもっと容易にその子どもの見方に近づくことができるだろう。

(愛育養護学校)

保育のいすみをくむ

堀合文子先生に伺う

〈出席〉

堀合 文子（十文字幼稚園）

田中三保子（お茶の水女子大学

附属幼稚園）

上坂元絵里（同 右）

嶺村 法子（中央区立明石幼稚園）

編集部

お忙しい保育のあい間に、現場の若い先生方にお集まりいたしました。保育の大先輩である、堀合文子先生を囲んで、現代の保育、子どもたちに対する思いを伺つてお話をすすめていただきました。（編集部）

◆ よく見る 見ぬく

一本誌三月号の「現代の幼児教育を考える」で、"子どもをよく見る。よく見て、何を言おうとしているのかをつかむ"と、先生はお書きになつていますが、子どもを、どう見て、それからどうするかというようなことからお話しいただけますか？

H・どうするかというよりも、"見ぬく"ということにつきるのでしたが……。「見ぬく」といっても、子どもの方が表してくれるのです。表してくれたことを、一言も見のがさないということ。たとえこっちで作る手伝いをしていても、耳はあちらこちらの方から聞こえてくることにも対していて、もし変なら、「あら〇〇ちゃん、それ、おかしいわ」と言えるように、全身の神経をはりめぐらせるようなものを持っていて。ただ集中して、目の前のことだけやつているのでは、だめでしちゃう。そこが一人一人を大切にして、きめ細やかに、というのではないから。ただ子どもが来たから、その子に細やかに、というのは誰にでもできます。子どもは活動している時にいろいろと表しているんです。表さないので困る。そのため遊ばせていました。（編集部）

るんですが…見えない所は時々見に行き、つかんでおく。そしてその時に「それはおかしい」とか「それはいやね」とか、一言でいいから必要なら言っておくことが大切なんです。自分の所に来た人だけていねいに、じやなく、常に全体を見ている、意識の中に入れておくということですね。

◆ 遊ぶ

——保育の現場にいると、保育者はつい遊びの中心になってしまいがちなのですが、私たち大人はどう遊んだり、かかわったりしたらしいのでしょうか。

H.（保育者が）自分で先たちになって遊んでしまうとか、子どもを遊んであげる、というのはだめなんですよ。そして、子ども達を、大きすぎしてひっぱりまわして遊ばない、ということですね。子どもが育たなくなるのです。

遊び方があるのです。三歳児の場合はちょっとちがうけれど……おにごっこなんかしていても、子ども達の行かない所に逃げていく。そうすると常に先生中心でなく子ども達だけで遊べるようになりますね。子

どものつむりになることかしら。だけど現実には大人だから体は目立つでしょう。いるだけで先生の方を追いかける。だからおにごっこに入っているようで入っていないような形になる。そうしながら一緒に遊び、そして友だち同士の関係をつけてゆくようになります。すると子どもは、こんな事を続けてゆくと今度は自分の頭で考えて遊びだす。先生は目立たない方がいいのですね。

最近の子はよく遊べます。幼稚園に入園してきた時にはもう一人遊びが上手にできるし、どんどんよく遊べる。入園当初から遊んでばかりしてあげていると、大きい組になって遊べなくなってしまう。だから、子ども達にまかせていわゆる自由に考えて遊ぶようにしておいた方がいいですね。すると子ども達がいろいろ自分から考えできます。そして要求もしてくるのでそれに応えてあげる。その時、ただ、子どもが言つてくれば何でもいいというのではなく、もう少しこうしたらとか言うこともあります。子どもは自分のやりたいことだから頑張れるのですね。だから「もう少し頑張りましよう」って言えるし、子どもも頑張ろうとす

る。先生が遊びを提供したり先生がふりまわして遊ぶ

と子どもの中の頭も働かないし判断もつかないし、頑張りも自分からは出せません。その時は楽しそうにみ

えてもよく子どもの心の判断をしたときを考えてみた方がよいですね。子ども達にやつてあげることは遊

んであげることではなく、手をかけてあげるということです。精神的にも手をかけてあげる、両方です。はじめに誰ちゃん

とでも達にやつてあげることは遊んであげることではなく、手をかけてあげるということです。精神的にも手をかけてあげる、両方です。はじめに誰ちゃん

じめ「先生、これできないからやつて」と言つてくる、それを一つ一つやつてあげていると、今度はできるようになつても甘えて「やつて!!」と言つてくることもある。それでもやつてあげるんです。甘えは承知

で。そうすると子どもの中身が成長してきます。やりすぎるということはないんですね。そういう意味で

も、今の子どもは敏感ですね。世話ををしてあげ要求をみたしてあげると子ども自身の中味が働いて成長する。相手をしてあげ遊んであげればその先生はよくしているようで結論は子どもをつぶしている事になる。

子どもたち一人一人の心の中にねにいるという事で、その判断が先生としてむずかしい一つでしょう。

◆ トラブルの解決

——子ども同士でトラブルがおきたような時は、どうなさいていらっしゃるのですか？

H. 若い先生は、よく子どもに聞いていますね。当事者の誰ちゃんと誰ちゃんをよんでも…。はじめに誰ちゃん

がどうしたとか、理屈で解決しようとする。そうすると先生自身も満足し、子どもも満足した様ですが、子どもは先生のさとしの言葉もみな受身となり、こんな

事のくりかえしではその時はわかつたつもりでも本当に反省はしないので、ただ頭の中に叱られた事のみしか残りません。理屈はあつても現場はちがうのです。

だからあつさりと、けんかは両方悪いんだから「ごめんなさい」でいい。熱心なのはいいんですが、熱心が却つておかしくなってしまいます。

——大人は何か解決させてあげようとするとんですね。最終的なことは、子ども達にまかせた方がいいということですか？

H. そう。年長と年少はちがいますけれどね。

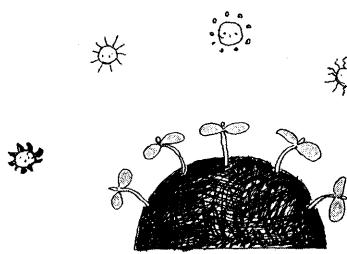
——両方悪い、ということは、先生は成敗(せいぱい)をしていないということですね。黑白をつけていない。その辺で、

H・けんかをした方もされた方も、何か感じていて……。

H・これからの人達には、友達関係がうまくいくということは大事なことで、お互いに子どもだから、ぶつかり合うけれど……。そういう時に人を許すとか、大人なら和解とか許し合える、そういう人を育てなければならない。それから、この国全体でも組でも、皆仲間、友達という意識をもたせなくてはだめ。よく“なんかの扱い方”“子どもなりの言い分、考え方を聞いてあげる”なんて理論家の人が言うけどそうじゃないと私は思う。この組の人は縁があつてここにいる、皆友達なんだから。小さいちは、まちがえてやつちやつたり、ちょっとふれただけでも怒る、でも、皆友達なんだから許してあげましょ、とあつさり許すといふこと、大事ですね。世界に出て行く人たちだから……。今だに相も変わらずケンカしてガンとゆずらない子がいる、昔はただケンカのやり方だけだったけれど、今はもっと広く考えていった方がいいですね。今、こういう環境にいることが大きくなつてひびいてくると思うから。自分だけで、まわりは敵という社会ですからね。

——こだわらない気持ちを持つということですね。かかわりの中で、どうすれば相手にわかつてもらえるのか。例えば、ボクはこうしたいのに、○ちゃんが横から入ってきたというような時、自分のルールが相手に伝わらない、でも一緒に遊びたい、というような場面があります。相手にどう伝えたらいいのかというようなことは?

H・そんなことは考えなくていい。入りたいという気持ちがある。他のことは考えない。「○ちゃんも入りたいたいよ。教えてあげたら?」と子どもに渡す。や



たらに大人が介入しない。おそらくもつと生意気な人だつたら「○ちゃん、これわからないんだよ!!」って言うでしょ。こういう子は「それだつてわからんいんだもん」って又言うんですよ。でも、その場は「それでもよく教えてあげてね」といて、その人についてはそういうことがある、ということを頭の中に記憶しておく。理屈で友だちをやつづけるのはよくないと思う。もう少し包容力があつてもいいと思うの。そういう人は大きくなつて又、人を理屈で攻める大人になる、それはしたくないです。だから、そのことを先生が一つ頭の中に入れておいて、ちがつた場面で「あなた、それやらない方がいいわ」とか「それはふざけヨ」「そんな理屈は言わないの」ということをちゃんと言つておかないと、ますますひどくなる、そういう人は思うように自分が大将になるし、『きまりのわからぬ子は入れてあげない』というような方向にもいきかねない、だから、入れてほしいといつて入れてもらえない人を頭に入れるよりは、逆に入れてやらない方の人を頭に入れておく方がよいですね。そして、何かの時に言つてあげる……。

H. 一人一人も一つの場だけで理解させたり育てたりでなくすべての面からその一人の子どもを育てていくという考えが大切です。ケンカが解決したからそれでよいのではありません。

◆ 今の保育は中身が問題

H. 場面がどうこうではないのです。その人でしょ。例えば、ふざけてばかりいて真剣にウルトラマンをやらない。本人はじやましている訳じやないが、まわりの人はじめまだと思うわけ。その時に「それはおふざけだからやめて」と言う。それをそのままやらせておくと、五歳位になると常習になり、みんなもそれを認めてしまい、その人は何でもおちゃらかしていく人間になつてしまふ。裏を返せば不眞面目。これはよくない

ですね。

——家庭でも、テレビのまねしてずつこけたりするのも、大人がユーモアとみなしている。子どもだからや

れば可愛いし、まわりをわかせて笑いをとる。家庭で

もある。世の中の風潮、お笑い番組的ですね。

H. 大きくなつてやつたつていいんです。でもその場を考えてやつてほしい。こういう世の中だから、あるのはしかたがない。だから、その場を考える判断をつけてもらうように、今からおさえておく。言つておかないと、ずーっとそういう人になつてしまふ。あの人はそういう人だ、と言われるのが怖いのではなく、その人がそういう人になるのが怖い。だから、真面目な時は真面目に。何かの時にふざけるのはかまわない。それだけの判断力をつけておかなきゃならない。こうなつてくると、今の保育は本当に「中身」です。この人のこれが残つては困るとか、この人の成長したあかつきのことを考へるのであって、学校がどうこうではない。何を作るから良い悪いではなく、本当に中身と中身のぶつかり合い、それで勝負するしかないですね。

——そういうことが、はじめにおっしゃった「見ぬく」というのですね。

H. そうです、そうです。

◆ 自由の線

H. もう一つよくきかれるのは、どこまでやらせるか、自由の問題ですね。本当の自由とは……規律があるて、それをふまえて本当の自由感を味わうというが定義のようなものですね。

とつくみあいなんかやつていると、「マネだけよ」と言いながらも、人の見えない所へ行つてやつているところは心配になる。でもやらせていい。決して、危ないからやめなさい、なんて言わなくていい。ところが、こちらは神経を相当使う。ぎりぎりの線までやらせてここまできて「あつ、そこでやめて」と止めると、ここまでの線が大事。この線までは自由に、ケンカしようがある程度は……。いくら約束があつても、やつてしまふ場合がある。それでもよく見ていたら、この一線があるのです。ただちゃんとやつているのなら、たくさんやらせてかまわない。でもひょつとした

拍子に突きさす格好をすることがある。こういう時は「それはダメ」と言う。今の子はゆだんがならないんです。親もいけない。ニュースなどで残酷場面があつても、見せてちゃんと説明したりする。だから

いけないの。うつかりすると、平気になつて、中学生位になると、見のがしていく可能性はあるんです。

情報過多だから、子どもにも入ってきてしまう。だから、昔やつた保育を今の子にはできないんです。本当に。前はよく、子どもと一緒に遊んでいたんですが、今は逆に、子ども達の中に遊びに行こうかなと思つても、またよ、あんなによく遊んでいるのならと、遊びに入らずに、ちがうところへ入れてもらう。でも遊びながら他の人の事もちゃんと見て、います。

——三学期になると、子どもだけでちゃんと遊ぶようになるんですね。

H. そうしないと、自由に伸びない。いくら、うちの園では自由にのびのびやっていますといつても、のびのびしすぎてこの一線を越せば放任になる。これより前に言えば阻止したことになる。この線——ここまでこの世界というものが大事。これを越えただめ、手

前でもだめ。ここを見極めることを努力するとよいのです……。相当な努力です。

——一生懸命見ていれば、その線は分かるものでしょうか？ 自分なりに。

H. そうですね。それは分かります。見ていてウツとここれまで出るけれど、もう少しやらせてみようと思う。三歳のホヤホヤではできない。ある程度の所までこなければね。くればのびのびと自分でやりたいこと、勝手に近いことをやりだす。頭が発達してくれれば悪いこともやり出す。それをちゃんと観察していかないとめちゃくちゃになつてしまふ。見て、いれば「そこまでね」と言えますね。一人一人にいちいち言わなくて、も、一回言えばいい。ただ、この線を見つけるのが大変かもしませんが……。言葉で説明するのは中々むずかしいですが、大体分かるはずです。

——見つけられるようになるまで大変ですね。

H. ある程度、こちらが我慢します。悪いことをする場合もありますね。将来しては困る、例えば同じ刀でも、突きさしたら困る。それはだめです。

——私たち新米の教師は、先生のおっしゃった一線を、

子ども達との“約束”として決めたがるのですが……。

先生はクラスの子ども達との約束は？

H・殆んどですね。その子一人一人です。この園と

をしていく。子ども自身にこういう風にしていくのがいいんだなと感じさせるようなことをしていかなければならぬんですね。

して“今日はあそこがぬかるみになつてゐるから行かないで”というような事務的なことはあるけど……。よく帰りの集まりの時「今日は○ちゃんがケンカしていたけど、皆どう思う？」なんてやつているけれど、そんな必要はないんです。結局、ある程度は子どもを信用しなくてはいけないでしょう。そうやつて一学期からやつっていくわけです。一学期は我が強い人や、が

まんできない人がいたりしても、はじめは知らん顔したり、満足させてあげたり、いろいろな方法をとつてやつてきて、二学期すぎると、中身が伸びたなと感じるわけですね。三歳も四歳も、程度はちがうけれどもつていき方は同じ。遊びの中身はちがうけれどやつてあげることは同じです。

——子ども自身の側からは自分がどんな能力を持つて、どういう風に使つたらいいなんて分からぬ訳だから、先生が良さを分かつて、良く出した時にはほめてあげ、まずかった時にはそれはちょっと、ということ



りますがそれ程むずかしいことではないですね。でも、子どもの持つているものをとらえて、この辺は困るからおさえていかなくてはという点を見極め、一つずつやつていくことが一番むずかしいですね。

◆ 知識は捨てて、無になる

H. むずかしいですね。だけど、もっとくだいて言うと保育者自身、感したままを言つたらしい。これをもう少し良くしてあげようというようなことは誰も思うけど、させて教えてよくしようというのは捨てた方がいい。そしてもうに「自分」であつた方がいい。そうすればものが見えるんです。三角のものを見て、これをもう少し丸くしたいなんて思わないでしよう。決してゆがんでいないものをこちらが持ち合わせていないとだめなのですね。だからやたらに「私は先生になったんだ」なんて気持ちはない方がいい。ただふらりと保育室へ行つて「あら、そこちがうわ」とか「ずい分きたないわね」と見たままを言えればいい。四歳だからこうしてあげなきや、こう教えなきや、などは全部捨てたらしいです。捨てられないのかしら。

——捨てられないというより、分からんないです。捨ていいものかどうか。捨ててしまつた後、何も残らないのではという不安もあります。

H. 何も残らないなんてことは絶対ない。実習生の方にみんな捨てていらっしゃい、捨てなきや現場へ出られないです、といつてているんです。捨てたってなくなるものではない、そこににじみ出てくる良さが尚あるわけです、本当は。

——残りは人間性だけですか？

H. そうはなりません。学問がちゃんとあります。それは捨てられないものです。それが後ろでちゃんと働くから大丈夫です。考えようとするからだめ。朝きて、「おはようございます」といつてもたもたしている子を見て、「あの人、早く自分ですればいいのに……」なんて思いながら見て、やつてあげた方がいい。その方がよっぽど良い先生です。入口まできてもたもたした人だったら、靴を出してあげたらい。無条件でやつてあげたらい。無になりなさい。自分を無にしないとそういうものが見えてこない。もう少し早くとか、あいさつができるとか、そんな目で見て

はだめ。あいさつをしようがしまいが、こちらがちゃんとすれば、するようになるんです。見たものをいふ、それがいいんです。その方がくり返し。一人一人ちがうから一人一人にする。その方がこちらの気持ちが通して、受け入れてくれる。特にここいら辺が昔とはちがいますね。前は子どもも察して受け取ってくれたけれど、今の子は本当にこちらの暖かい心を待つてい

る。だから言葉で言うと、反撲したりして、怒れない

んです。

——「やめなさい」ではなく、「やめた方がいいんじやない?」と言うと、子どもは言われてやめるのではないのですね。

H・先生の心の読み方、子どもの受け取り方がちがうんですね。暖かさがちがうでしょ?

——それは、表現のテクニックじゃなくて、先生がその子をどう見たかということの表現の結果ではないでしょ? 「やめなさい」と言った時には、その子のそれがイヤだと思っているかもしれない。「やめた方がいいんじやない」と言う時には、その子をもう少し暖かくつんで受けとめ、「でもしない方がいいわ

ね」という気持ち。おそらくそれの結果だと思う。だから子どもは言われた、「言葉」ではなく「心根」をとる、ということですね。

H・その神経の敏感さはすごい。鋭いですね。だから言葉は気をつけないと……、よっぽど危ない場合は言いますけれど、命令の言葉は殆んど使えませんね。

◆ 気持ちをくんでくれる

——最後に分からぬ所をもう一度……。先生はよく、「保育者は考えなければいけない」とおっしゃいますが、例えば子どものすることを見ていて、思ったことを全部言うと子どもには響かないし、聞いてくれなくなる。だからそういう部分を考えなくちゃいけないのかな……。あ、ここは私自身が止めなくてはいけないのかなとか、自分の価値基準でなくとも、困ったと思わなければいけないのかなとか、そういう変な所で考えることがあるとすごく思うんです。後は自分の修業なんですが、例えば、きたない所をきたないと感じるか、困ったと思わなければ困ったと言いようがない自分が何の問題……。

H. そう、あとはその人の価値感というか、大変なレベルになる。

でも、もつと思わなければ、感じなければいけないのではと思われる必要もない。例えば、園の中の大人同士の約束で“……は危ないからしない”というのがある。自分は別にかまわないという気持ちもあって、ここまではと思って見ている、というような時。でもそういう約束が大人にはあるわけ。そした仕方がない。ただ、それを言う時の言い方を変えたらしい。ただ「ダメ」ではなく「ちょっとそれ我慢してくれない」という。それは大人の世界の団体の一つのきまりなんだから仕方がない、これはどの園でもあると思う。それで若い方が困ってしまう場合もある。極端な場合、園長さんの理解がなくて……ということもある。でも園としてのきまり、ということであれば、その中にいる以上は、園児である以上は、我慢してもらうよりないですね。

——そういう言い方をすればそれなりに子どもには受けとめてもらえますね。

——こちらものすごく素直に生きなくてはいけない。やらせてあげたい気持ちはあるけれど、仕方ないから

H. 我慢してね、と正直な気持ちを言わざるを得ない。

H. そうです。その言い方によつては、子どもは逆にそこと自体よりも、気持ちを持つていてくれるからありがたいし、こわいです。そこは子どもだからありがたいし、そういう風にもつていかないとだめでしょうね。今人は気持ちをすぐくくる。ものすごく持つていてくれる。本当に心を容してあげるという気持ちを持つていればいいんじゃないですか。今人はそちらの方が大事。こちらの気持ちを本当によくもつてってくれるから、今のお子さんはそれを一生懸命やらないと育たないということですね。すべて幼児にないのでなく、先生がいかに頭を使うか、感じるか、神経も使うか、その人によるので今のお子さんでなく保育者自身の問題です。それが今の幼児教育の現場の声ですね……。

お話をまだまだ続きましたが、誌面の関係で、ここで終わらせていただきました。堀合先生、諸先生方、どうもありがとうございました。（編集部）

『母親!』 ルイ・ジュヌヴィ&エヴァ・マルゴリー 著（朝日新聞社）

『父子家庭を生きる—男と親の間—』 春日キスヨ 著（勁草書房）

『近代家族とフェミニズム』 落合恵美子 著（勁草書房）

江原由美子

子どもたちが一人ひとり違うように、子どもたちの家族も親も皆違う。そして親の生きている状況も皆それぞれ異なるのである。「親ならばこうであるべきだ」「家族ならばこうするべきだ」という見方でなく、親や家族の多様なありかたを教えてくれる本を、三冊紹介しよう。

あるということについて、本当はどう感じているのか」を明らかにした本。アンケート調査にもかかわらず、この本には「母親たちの生の声」が実際に率直に語られており、母親たちの生き方や悩みが脈々と伝わってくる。読んでいるとこんなに異なった感じ方があるのかと感心するし、同じ「母親という役割」でも持つた子どもの個性や母親の生きなければならぬ環境によつてまったくその役割の難しさが違うということが、良く分かる。特に、母親たちがそれぞれの子どもにぶつかつてその「個性」ゆえに戸惑つたりどう扱え

『母親!』

アメリカの母親たちへのアンケート調査をもとに、「女性たちが、自分の子どもについて、自分が母親で

ば良いのか悩んだりしている様子がありのままに語られており、母親でも子どもが全て分かるわけではないこと、親子といえどもやはり「人間関係」なのであって「相性が良い」場合はかりではないことなど、普通母親が他人には言いたくいような内容にまで及んでいる。母親たちはありのままの人間として、自分の母親としての限界や欠点を知りつつ、それでも「母親だから」精一杯努力しようとしているのである。しかし、こうした女性たちの感じている「母親という重い責任」とそれに伴う努力を理解しようとしない男性たちが多い。この本の中では、女性たちがこうした夫たちに対してどんな怒りを感じているかも率直に書かれている。その他、障害のある子ども・問題がある子どもを持つた場合の母親たちの感情的動搖・生活上の苦労・生き甲斐や満足感、働く母親の罪悪感や満足感、シングルで子どもを育てている母親たちの重い责任感など、多様な状況の中で生きている母親たちの声も沢山載っている。一つ一つの女性たちの声が心に響くと

にも、これほど多様な沢山の声を聞くことで、「今の母親は～～だ」「母親ならば～～であるべきだ」等の社会常識など、ふっとんでしまう。その意味で母親に対する社会通念から離れてみるためには格好の一冊である。厚い本であるが、母親の手記を集めたような内容なので、一気に読めるだろう。

『父子家庭を生きる—男と親の間—』

広島市における父子家庭男性たちの集いをもとに、現代の日本で父子家庭の親をすることの悩みや苦しみを明らかにした本。母親であることと自分の生き方との矛盾、家庭と仕事の両立の困難さという女性の問題に関しては、随分理解がされてきたけれども、母親がないという状況の中で父親が子育てと経済的支え手という役割を両方引き受けなければならなくなつた時、どんな問題が生じるのかについては、ほとんど理解されていない。それどころか、「女親こそ親である」という通念が支配している社会の中で、「男親だ

から「だ」という偏見にさらされたり奇異の目で見られたりすること、さらに困難な状況に陥らざる。本書の中で、父子家庭の男性たちは、「世間の目」「近所の目」「親類の目」「同僚の男性の目」「職場の目」を気にせずにはいられない生活、それなのに理解されず孤立させられてしまう生活を述べている。衝撃的なのは、父子家庭の男性たちは経済的な困難にもさらされていることである。現在の職場で、子育てと両立できる条件の職場は少ない。残業や休日出勤なしで働くことすると、男性でも非常に給料が減ってしまう。その上、保育料も増えがちな家庭の出費も家計を圧迫する。これらの男性たちは、家庭と仕事の両立に苦しむ女性や、母子家庭の親である女性と同じ苦労を抱えている。この本を読むと、働く母親たちの困難とは、女性であるから生じるというよりも、子育て責任と職業生活が両立しない現在の労働条件のゆえに生じてくる問題であることが良く分かる。しかし父子家庭の男性に特徴的なことは、その苦境を訴えたり相談で

きる機関や人が余りにも少ないとある。いやそれ以前に「男の面子」から、相談することすらできないことも多い。男性も子育て責任を持つのが当たり前なのに、現在の社会では一人でその責任を背負っている男性に、揶揄やからかいの視線を投げかける。だから男性たちは「男の面子」にかけても相談などすまいと考えるのだ。男性が親として生きることは現在こんなにも難しいことなのである。

『近代家族とフェミニズム』

前の二つの本が、現実の生の声から親であることや家族であることを問い合わせてくるのに対し、この本は歴史的な観点から現在の親子関係や家族関係を見直させてくれる論文集である。特に、巻頭の「〈近代家族〉の誕生と終焉」は、「母子や家族の親密な感情」という我々が自明視している家族観が、「〈近代家族〉において始めて成立したものに過ぎずせいぜい二〇〇〇年の歴史しかないことを主張し、発表当初からかなり

緑蔭図書紹介

の反響を呼んだ論文。「母性」や「子ども」についての我々の社会通念を、大きな観点から見直してみたい人にはうつてつけの本である。本書には、先に挙げた論文の他、「出産の社会史」や「近代家族における子

どもの位置」などの社会史関連の論文、現代家族に関する論文、フェミニズム関連の論文なども収録されており、多様な読み方ができる。

(お茶の水女子大学)

『倉橋惣三「保育法」講義録』 土屋とく 編 (フレーベル館)

『新幼稚園参考書』 東京都私立幼稚園協会 編・著 (フレーベル館)

『のばらの村のものがたり』 ジル・バークレム 作 (講談社)

石 村 京

『倉橋惣三「保育法」講義録』

「幼児の教育」誌を継続して読んでおられる方なら、このタイトルを見て「この間『幼児の教育』で読んだわ」とおっしゃるでしょう。その通りなのです。

一九八九年一月から同年五月号迄の『幼児の教育』に

掲載されていて、私もその時読みました。それがこの度一冊の本としてまとめられて、フレーベル館から発刊されました。

この「保育法」講義録とは、私どもの附属幼稚園の大先輩である菊池フジノ先生が、まだお若い頃(昭和

九年四月)に、その当時の倉橋惣三園長が保育実習科の主任教授として、実習科の生徒に講義されていたものを学生から借りて写され、「倉橋先生の講義のノート」を作りあげられたものとうかがっています。倉橋先生の幼児教育の講義の内容の深さは勿論多くの人々から語り伝えられていますが、それをこのようなノートに記されておかれたのは偏に菊池先生の幼児教育に対する情熱と、倉橋先生に対する尊敬の賜であったといえましょう。そして菊池先生は附属幼稚園教官としての長い在任中もその後も、ずっとこのノートを大切に保管して、折ある毎に開き学ばれたことを知り、感慨にうたれる思いでした。

その内容については既に御存知の方もあるかと思ひ、見出しだけ載せますと「第一章 幼稚園」「第二章 保育法の原理」「第三章 保育法の原則」「第四章 保育方案」「第五章 保育項目」から成り立っています。これは昭和九年四月より翌十年三月まで一年間にわたって行われた保育法講義内容です。これをみると

倉橋惣三主事が幼児教育の基本理念を学生たちに大きな信念をもつて語り、保育者の養成と幼児教育の達成に熱い情熱を注いでおられたことがわかります。そして実際に講義をされてから半世紀以上の時を経た今、現代の幼児教育の場にある者に働きかける大きな原点をもち、改めて幼児教育を考えるきっかけを与えてくれる、時を越えた新しさえ感じます。

この大切な宝物を大事にしておられた菊池フジノ先生と、これを世に出すための機会と努力をされたお茶の水女子大学児童学科第一回生として、幼稚園教員養成の場で活躍されている土屋とく氏に、感謝の気持ちを願わしたいと思います。

『新幼稚園参考書』

幼稚園参考書は昭和三十六年に刊行され、昭和三十九年幼稚園教育要領改訂時に改訂され、そして新教育要領告示、施行の時、全く新しいものとして生まれ変わりました。この書は幼稚園教育に関して、その教育

緑蔭図書紹介

の本質、現場での教育の計画と実践、その運営及び幼稚園教育の歴史などに関する多くの実践例をあげて編集されたものです。新教育要領の基本をふまえ、幼稚園教育のあり方と実践を提示する書として発行されました。

今年もきっと幼稚園教員の養成課程を経て多くの新しい教員が現場で活躍しておられると思いますが、中には学生時代に学んだ保育の原理が実際場面では円滑に運べなかつたりしてとまどつた思いの方もあると思います。壁につきあたつたときそれを乗り越えるには、自分が学んだことを今一度思い起こすことや、現在の悩みや迷いを話しあつたり先輩からのアドバイスを受けることや、より前進して新しいものを受け入れる努力をすること、例えば講習会や研究会に参加した

そうになります。そのような思いのとき、実際の幼児教育はこうして行われているという多くの実践例を載せて、現場の人たちに方向性と安定感を与えてくれるものとして、この書はきっと役割を果たしてくれると思います。

また更に幼児教育について深く知りたい、学びたい者にとって、巻末の参考図書は文字通り参考になるものが多く載せられているので、これを見ながら間口を広げ、掘り下げていくための書を取り出すのに役立つことが多いと思います。

『のばらの村のものがたり』

『のばらの村のものがたり』は四季に因んだ話で、四冊の絵本で構成されています。

小川に沿つて続く野ばらの茂みの中に目をこらして見ると、かわいい煙突から一すじの煙、木の幹にはドア、その奥に急こうばいの階段……。ここにのばらの村があります。ウイルフレッド坊やの誕生日をアップ

ルおじさんやもりねずみだんしゃくや、ディジイ夫人、そして子どもたちみんなでお祝いするのが「春のピクニック」。「小川のほとり」では、ポピーとダステイの結婚式を村中みんなで楽しく、心をこめて祝いました。「木の実のなるころ」では、木の実を集めに行つて迷い子になつたブリムローズを探すのに、心配で村のねずみたちは夜なか中探しました。「雪の日」では、ねずみたちはとつておきのおしゃれをして集まり、ダンスをしたり、クリームケーキやシチュー や ブラックベリー ポンチ を食べたりして明け方まで楽しみました。窓の外ではまた雪が降りはじめました。そしてのばらの村のねずみたちは、みんなぐっすりと眠っていました。

本当に平和で穏やかなのはらの村の話、これは小さいい頃から庭の草花や虫が好きな女の子だったジル・バークレムが、成長してロンドン市内に毎日通学するようになつた頃、自分の生まれたロンドン郊外のエピングの豊かな自然の生活を改めて見直すようになり、

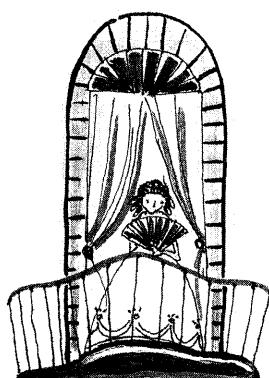
これが『のばらの村のものがたり』になつたとあります。七年の歳月をかけて生み出されたこの絵本には、優しいねずみたちの様子を教えてくれる挿絵が多く画かれています。そして岸田衿子氏が丁寧に訳をつけられました。大人が読んで心がやすらぐ思いがするのは勿論ですが、子どもたちには保育者が一頁ずつ絵を見せながら読んであげたら、きっと気持ちがゆつたりしてくるのではないかでしょうか。保育者に読んでもらつたこの本が身近にあって、時々取り出して絵をくりかえし見たら楽しいですね。ねずみたちの様子がとても可愛らしいからでしょうか。最近になつてデパートの食器売り場などでは、ティーカップやケーキ皿などにも、この絵のものを見かけるようになりました。また、野ばらの村のものがたりの続編が二冊、やはり講談社から出版されていることもつけ加えておきます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

『グリム童話——子どもに聞かせてよいか?』

野村 泰 著（筑摩書房）

寺崎 弘昭



夏の木蔭で読む本には、どういうものがふさわしいのでしょうか。スラスラと読めて一日で読み終わってしまうというのも、夏の暑さを忘れる消夏法としてはいいのでしょうか。ジリジリとした夏の暑さを木蔭で楽しむにはちょっと勿体ない気がします。かといって、あまりに難しい本を相手にするというのも、居眠りしながら想像力を羽ばたかせ夏を楽しむにはもってこいですが、そんなに木蔭の読書を楽しむ日数のとれそうもない状況では結局何ページも読まないうちに秋の声を聞くはめになりそうです。

そのてん、本書は最適です。ドイツ文学者である著者の長年の蓄積に裏づけられたこの本は、その知見を

基礎にわたしたちが安心して連想ゲームを楽しむことができるものですし、いちおうわたしたちにお馴染みだと思われている『グリム童話』というこの本の素材は、平易な語り口とバランスのとれた先行研究の紹介とにのせてわたしたちを夢見心地にさせてくれるにじゅうぶんです。それでなくともわたしのはあい連想に走りがちな本の読み方しかできないのですが、そのわたしが安心して連想に身を任せられかつ七日間で読み終えることができたのですから、夏の木蔭の読書用としてはまさにお薦め品というわけです。

わたしたちにお馴染みだと思われている『グリム童話』も、意外に一筋縄ではいかない代物のようです。

たとえば、『白雪姫』。どうもわたしたちは、「お子さま向け」に改作された『白雪姫』を聞いたり見たりしてきたもののがうです。ちょうど、「お子さま向け」の『ロビンソン・クルーソー』や「お子さま向け」の『ガリバー旅行記』ですましてきたように。

たとえば、『白雪姫』の后は狩人に白雪姫を殺して肺と肝をもつてくるよう命じています。そして、狩人がもつて帰った肺と肝を、猪のそれだと知らず、塩ゆでにしてペロリと食べてしまっているのです。また、后は三度も——一度目は絹紐をもつて二度目は毒櫛をもつて三度目は例の毒林檎をもつて——白雪姫の命を狙っていました。そして話の結末は、こうです。

婚礼の式にかけつけて、ほかでもない、白雪姫をみた。后は、その場に、立ちすくんだ。このときはやく、鉄の靴が炭火にのせられていた。つづいて、まつ赤に焼けた鉄の靴が、やがて、はさんで、はこばれてきた。后はその靴をはいて、ピヨンピヨン跳ねつづけなくてはならなかつた。最期に息が絶え

て、ドタリと倒れた。(池内紀訳、ちくま文庫)なんと后は、王子と白雪姫の結婚式にまで駆けつけて、そこまで赤に焼けた鉄の靴を履かされて息絶えていたのです。しかも、一八一二年の『グリム童話』初版ではその后は繼母ではなく実母だったのです。

このように「残酷」な話なのですから、「子どもに聞かせてよいのか」という疑問が生じてくるのも当然でしょうし、ディズニーランドの世界にはふさわしくないと大胆にカットされたのも当然でしょう。しかし、著者・野村先生はこうしたディズニーランド的対応には反対です。言語学者であり民俗学者であつたグリム兄弟が採集した昔話『グリム童話』は、〈加害／欠如〉とその除去という物語の骨太な構図に満ちています。それはいわば傷つけられた全体性の癒しの儀式の物語なのであって、話の中に中世的な刑罰の諸相が現れてくるのも、昔話が中世の土壤のなかで醸成したものであることはさておいても中世的刑罰が傷つけられた共同体の癒しの儀式としてあつたことと相即的であ

るようと思えます。だからなおさら、『加害／欠如』が線の細いものになつてしまふと物語の治癒の儀礼としての意味は薄くなつてしまうのです。

『残酷な母』というのは「古いものにしがみついていようとする子をむりやり引き離し、つなぎ止めて、いる綱を断ち切つて、発展を促す役目を引き受けているのです」と著者は言います。それは、「生成力の擬人化」されたものなのです。その意味では、『グリム童話』は子・娘の自立の物語であり（たとえばヘンゼルとグレーテル）、子の親離れを促す酵素に満ちていると言えましょう。

子どもたちは、心の中の自立劇を昔漸の中で具体的にしかしフィクションとして演じることができるのであります。こうした自立劇はもちろん、離乳期などにも生じています。しかし、物語としては最もド拉斯ティックにみえる時期が設定されるのが常です。じつさい、七歳で森に連れて行かれた『白雪姫』は早い方として、十五歳のとき百年の眠りに陥る『いばら姫』にみられ

るよう十二～十五歳に危機が設定されるものが多いようです。日本でも、「七歳までは神のうち」と言われ七歳というのは「子ども」の始まりと考えられていましたし、十二～十五歳といえば娘宿・若衆宿に入る年齢です。

つまり、『グリム童話』はファン・ヘネットのいわゆる『通過儀礼』（弘文堂）の物語なのです。もう少し限定して言えば、それは、人類学者ターナーが『儀礼の過程』（思索社）で分析しているライフ・クライシス儀礼の物語なのです。古い世界から新しい世界に渡る際に生じるコミュニケーション（これをターナーはファン・ヘネットが命名したりミネール儀礼に対応する仮構的世界の意で用いています）こそが『グリム童話』の世界なのです。その意味で『グリム童話』は、まさに『子どものためのメリヒェン』だといえるのでしょう。

野村先生の以上のような『グリム童話』理解は、じつさいに千葉県松戸市の「おはなしキャラバン」の

実践で実践的に論証されたことを、わたしたちは浜島代志子さんの『昔ばなしは今ばなし』（大月書店・国民文庫）によって知ることができます。浜島さんたちが『白雪姫』を本来のかたちにもどして、つまり実の母である后が肺と肝を食い三度も命を狙い拳句にまつ赤に焼けた鉄の靴を履かされて息絶える、というストーリーを復元して人形劇に仕上げました。子どもたちとの対話もはさんだ演出ともあいまって、子どもたちのめりこみぶりが相当あることがよくわかります。『グリム童話』を「お子様向け」にする必要なぞ決してなかつたのです。

さらに浜島さんたちのいわば昔嘶を実践的に読む試みは、意外なことまで明るみに出すことに成功しました。子どもたちと一緒に参加している親・大人たちが意外にも後に感情移入して観劇していたのです。この成果は、浜島さんが鏡の精を実際に出現させて、鏡がもう一人の后自身であることを強調したことと、若さへの執着（白雪姫の肺と肝を食べようとする）がそ

の執着を象徴的に表現しています）から解放されまた子離れを達成するプロセスで苦悩する后の姿がクローズ・アップされたことによるものだと思えます。

ともあれ、『白雪姫』は子どものためのメルヒエンというだけではなく、大人のためのメルヒエンでもあつたわけです。后もまた、まつ赤に焼けた鉄の靴を履くことによって、彼女のライフ・クライシスを渡るのです。まさに、『グリム童話』はその原題どおり『子どもと家庭のためのメルヒエン』だったのです。

考えてみれば当然かもしれません。かつて昔嘶は炉辺の語りだつたのであり、大人も子どもも参入するものでした。そして今ふたたび、『グリム童話』が語られ演じられるただ中に、大人と子どもがそれぞれに参入しそこにコミュニタスがたち現れようとしているようです。

（お茶の水女子大学）

『ミッドナイト・コール』 上野千鶴子 著（朝日新聞社）

『死を考える』 中村真一郎 編（筑摩書房）

中 村 弓 子

『ミッドナイト・コール』

著者は、この本を書くことによってルール違反を犯した、と「あとがき」に書いている。社会学者として、つねに自分の「私」は棚上げにして、「社会」の問題を分析し「社会」の期待する答えを出すことをルールにしてきたのに、このエッセー集では、「私」としての著者が「社会一般のひとつ」ではなく「私」としての読者に真夜中の電話をするようにひつりと「私信」を送っているからである。

しかし、この「私信」は、いわゆる「社会的問題」の手前にあると同時に、その先にあるものにも突き抜けており、その意味で、著者の従来のフェミニズム論

とはまた次元の違う普遍性を獲得して、読者に静かだが深い反響をひき起こす。

天安門の学生たちの悲痛な姿をして、「全共闘世代」として（私自身も他ならぬこの世代であるが）すべての「負けいくさ」のもたらす外傷と行く末に思いを馳せる「世代体験」。家族から、共同体から、自分を縛るすべてのものから脱出することに成功し、仏教でいう「往相」を得た女性にとっての「還相」すなわち「帰り道」はどこにあるかを問う「往還」。男の論理」をわがものとしてそれを武器に相手の懷に切りこむという「裏切り」を果たしたために、男の世界でも女の世界でもフリーク（異形の者）となつた人間の

孤独と自負を記した「フリーク」、など。

しかし、すでに朝日新聞連載中から、中でも特に強い印象を私に残したのは「老いと死」と題するエッセーだった。

著者が最近「老い」のテーマに関心を持っていると知った人たちから、今度は死について考えてみないかと誘いを受けるとき、著者はそのたびに当惑してしまふ、と言う。「老いと死は、いつもセットで語られるがほんとうにそうだろうか。（中略）生の意味を知らないわたしが、死の意味だけ知っているわけがない。

わたしがまだ生きているのに、死ぬ時だけとつぜん意味づけられるのは、まっぴらだ。（中略）そんなわたしが老いについて考えるのは、よく生きるためであつて、死に方を考えるためにではない。絶対というもの欠缺いた世界では、五十歩百歩のそのわずかなちがいが意味を持つ。『よく生きる』ためには、五十歩を五十一步にするためにも、考えること、なすべきことはいっぱいあるのだ。」

著者の「老い」に対する関心は、「逆々暮れ族」の中に「生きものはさかりを迎へ、そして衰える。衰えていく生きもののあり方を受け入れる思想を、わたしは何とか獲得したいとねがっている。」とあるように、それはあくまでも「衰えていく生きもの」の問題であつて死の問題ではない。しかしこのように老いと死を峻別するところに逆説的に死の在り処が浮かび上がり、「わたしはただ生きているのに、死ぬ時だけとつぜん意味づけられるのは、まっぴらだ」という著者の強烈な「境界意識」の中に、やはり逆説的に、絶対的、宗教的なものとしての死の意味づけが浮かび上がつてくる。葬式仏教を疑問も持たず受け入れるような心性と、「わたしはただ生きているのに」と言いつる意識の鮮明さとのあいだにはなんという距離があることだろう。著者の自己把握のこのよう鮮明さと潔さに私は打たれ、そのようなものを出発点としてこそ真の思想的対話も可能になるのだろうと思つたのである。

ところで、このように逆説的に死の意味を考えさせる文章に対して、今度は、正面から死そのものを考えるための本も存在する。

『死を考える』

この本の編者も冒頭で次のように述べている。「一

定の宗教的立場、あるいは無宗教的立場を確乎として所有する者でなければ、死についての決まつた考えを述べるのは、極めて困難である。そして、現代の日本人の大多数は、私と同じ、ある特定の宗教の熱烈な信者でもなく、又、断乎として唯物論的立場に立つ」のでもない。

序章の「死をめぐってこの回想」に明らかなように、編者自身は現在「宇宙の魂の存在のなかに、自分の肉の消滅と同時に、私の微小なる魂も一滴の水のように溶け入つて、永遠の、意識なき平和のうちに消えう」というインドの聖者ラマクリシュナの思想に帰依しているにしても、そこに至るまで死と魂の永生の問

題をめぐつて長い思想的遍歴をしている。本書は、その思想的遍歴の里程碑ともいべき文章を古典から現代まで、編者自身の案内の言葉を添えて収めたものである。だから、読者はこの本を読むことによつて、秀れた「死の思索者」である編者とともにみずから「死を考える」ことを促されるのである。

ここには死に対するじつに様々な考え方方が記されている。またその中で、ローマのストア派哲学者マルクス・アウレリウス帝の『自省録』の「自然のわざを恐れる者があるならば、それは子供じみている。しかも死は単に自然のわざであるのみならず、自然にとっても有益なことでもあるのだ」というような思想が、時代も文化圏も異なる道元の『正法眼藏』の「生きたらばただこれ生、滅^{まつた}ればこれ滅にむかひてつかふべし。いとふことなけれ、ねがふことなけれ」というような思想と響き合つたりもしている。また同時に、プラトンの『ペイドン』は「魂は不死にして不滅なるものであり、そして、われわれの魂はほんとうに、ハデ

スにあつて存在をつづけるのだ」と魂の永生を声高ら

かに主張し、スペインのキリスト教神秘主義の聖テレジアの詩「配所の嘆き」は、地上の生活を「配所」と見て、「あなたに会うために／私は死にたい」「私をここから出してください／あなたに会うために」と歌う。

また、ガン患者としての限界状況の中で宗教学者岸本英夫は『わが生死観』の中で、「死というものは、そのものが実体ではなくて、実体である生命がない場所であるということである」と自らの達した認

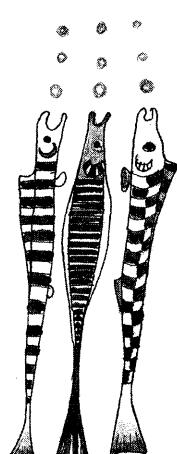
識を記している。

「死について考えるには、現代生活においては余程の時間的な贅沢が要求されるのである。働いている人の大部分にとつては、死は他人に起る事件に過ぎない」と編者も言うが、にもかかわらず死は、言うまでもなく、私たち一人一人にとって決定的なことがらである。古来の銘句「メメント・モリ（死を想起せよ）」が告げるよう、心静かに過ごせる季節こそ死を思索するにふさわしい季節なのではなかろうか。

（お茶の水女子大学）

『ウイリアム・モ里斯伝』

フィリップ・ヘンダースン著（晶文社）



皆川美恵子

ケイト・グリーナウェイ（一八四六～一九〇一）、
ウォルター・クレイン（一八四五～一九一五）といつ

た名高い絵本作家が活躍した時代のイギリスでは、自らの内に秘められた黄金を黄金として發揮しうる人々

緑蔭図書紹介

が数多く集い合い、互いに友愛の光輝をも散乱させながら、十九世紀の世紀末芸術を虹の帶のように彩つていた。

ジョン・ラスキン（一八一九—一九〇〇）の芸術思想を継承し、虹の輪を弥増して大きく濃きよとに、もてるかぎりの力を尽くし、自らも、建築、装飾、文學、書物出版など、幅広い分野で生活芸術の創造者となり、社会主義者としても目覚ましい活動をした巨人に、ウイリアム・モリスという人物がいる。一八三四年三月二十四日に生まれ、一八九六年十月三日に惜しまれながら六十二年の生涯を終えた。そのモリスの伝記が本書である。訳者解説によると、モリス没後から今までの約一世紀間に、何とイギリスでは五十篇余りの伝記が出版されているとのことである。

私は、最近になってモリスのことが興味深く思われるようになつた。その仲立ちは、日本でのモリス紹介者として著名だった故小野二郎氏の著作と、小野二郎氏の弟子にあたる本書の訳者でもある川端康雄氏に

拠っている。雑談という日常生活のつましやかな喜びを川端氏と繰り返しているうちに、小野二郎氏の人と仕事についての関心が触発され、小野二郎氏の生の軌跡の陽気な輝きから、さらにウイリアム・モリスの人と仕事に興味を抱くようになった。

モリスのを目指した「人間の芸術活動の總体、本質」については、小野二郎氏の名著『装飾芸術』や『紅茶を受皿で』の論究が、今もつて上質な読み手を待ちかまえている。そして聞くところによると、モリスの仕事は、今や、そのユートピア構想が、現代の労働や余暇、人間の基本的欲求、マルキシズム再考などの問題をも孕んで、熱い視線を受けて見直される機運にもなるらしい。それら仕事上の論評はここでは扱置いて、私は本書の重さを確かめながら読了してみて、芸術に魅せられた人々の情熱の源泉や方向性に裏うちされた、人生という装飾——生（そして死）の模様が浮き上がつてくる興奮に襲われた。そのことについて言及してみたい。

モリスは、一八五三年オックスフォード大学に入学し、そこで生涯の友人を数多く得ている。「兄弟団」（プラザーフッド）と名づけられたそれらの友人を基盤に、やがて芸術職人集団を組織し、モリス商会を設立して実業家として奮闘し、世紀末の芸術運動を推進していく。モリスにとって殊更に親しい友は、大学の入学試験で隣席となつたエドワード・バーン＝ジョウズだが、この二人は一冊の書物『アーサー王の死』（トマス・マロリーがアーサー王伝説を集成した書物。一四七〇年頃完成。）と出会うことによつて強い絆で結びつき、人生を導く同じ基調を共に歩むことになつていく。

さて、その『アーサー王の死』とは、神秘的な宗教と高貴な騎士道的行為が交響した、人名や地名にひそむ失われた歴史とロマンスの世界が盛り込まれたケルトの伝説（神話）で、当時のロマン主義的芸術のヴィジョンを抱く者にとって、靈感の源泉であつた。

やがて青春時代の彼らに、異性としての女性が登場していくことになる。この女性の登場によつて、伝記宇宙はまるでモリスの装飾藝術における、古代の魔法のかかつたケルトの森の茂みの中の、フローラや木の実や鳥のように、女性が美しい色彩をもつて耿耿と光を放つていくのだ。

バーン＝ジョウンズの妻となるジョージアーナの美しい眼については、たとえば、ある人により次のように語られる。「ジョージアーナ・バーン＝ジョウンズのような眼にお目にかかることは後にも先にもない。私たちは長いこと付き合つてきたが、彼女にまともに見つめられると、いつも我知らず自分の心中を少なりとも省みざるをえなかつた。それは批判や非難を恐れたからではなく、深い英知を湛えて水晶のように澄んだ彼女の眼が、見るに値しないものの上に止まらないようにするためだつた。」

ウェィリアム・モリスの妻となつたジェインに至つては、その女性としての美しさは、ヘンリー・ジエーム

スの筆によつてかくのようすに描寫される。「おお、そ

れが何とお前、あのような夫人とは。驚嘆描く能わづだ——未だに脳裏に焼き付いている。ミサ典書の挿絵の切り抜き——と言い表わしてみても、彼女の印象はほんのかすかにしか伝えられない。なぜなら、そのような形象に生身の体を与えられると、度外れに恐しくかつ素晴らしい幽霊と化するのだから。一体、彼女は過去に描かれたラファエル前派の絵画すべての大いなる総合であるのか、それとも彼らの絵の方が彼女の〈鋭い分析〉であるのか、つまり彼女がオリジナルなのか、コピーなのか、どちらとも言いかねるのだ。いずれにせよ、彼女は一つの驚異だ。」

背が高く、やせた青白の顔、黒い豊かな長髪、そのジエインがロング・ドレスを身にまとい、モ里斯、バーン・ジョウンズ、ロセッティのモデルをつとめたことは有名である。彼女こそは、イギリス世紀末芸術の女王であり、夫は勿論、夫の友人たちに幻と理想を与えた貴婦人であった。自然が生み落とした秘跡（ミ

ステリー）のような女性であった。

ところでモ里斯は、妻となる前のジエインをモデルにアーサー王の妃グウェイネヴィアの絵を描いた。しかし絵が完成に至るには、ロセッティ、そしてマドックス・ブラウンの手が加わつて初めて仕上がつたといふ謂われがある。またモ里斯はジエインと家庭を築くため、友人フイリップ・ウェッブに設計を依頼し、「レッド・ハウス」を建築する。中世の趣きをもつた、歴史感覚を備えたロマンスに溢れた、しかし気取らないその家は、五年間、住んだだけで手放すことになる。イギリス住宅建築に大革新をもたらし、モ里斯の裝飾芸術において記念碑的な理想の館——「レッド・ハウス」に安住することがかなわなかつた。

モ里斯とジエインは、二人だけの家庭的幸福を獲得することができなかつた。伝記作者は、ジエインとロセッティの親密な交際を明らかにしてゐる。モ里斯は、ある友人にこう書いてゐる。「人生は空虚なものではなく、無意味に作られたものでもなく、何らの形

でその各所が相互に調和し合っているのであり、世界は、美しく、不可思議に、恐しく、そして崇敬の念に満ちて、動き続いているのだ」と。

ケルト神話、アーサー王の物語には、妃グウィネヴィアに裏切られる王の苦悩が描かれていて、三人によつて織りなされる自由と哀しみ。三の主題はケルト神話において、他にも三人の妖精女王、その女王も三相一体で、つまりは九つの相をもつなど、マジカル・ナンバーとなつていて、一によつて全体を支配するのでもない、二によつて細部に閉塞するのでもない。
トライアーヴドの変幻自在さは、古代の海や森の深遠な不可思議さ、豊かな自然の成長を開示するかのような神秘に満ちている。

『雪の夜に語りつぐ』——ある語りじさの昔話と人生

笠原政雄 語り・中村とも子 編（福音館）

近藤伊津子

「自然は芸術を模倣する」とは、オスカール・ワイルドの言葉だが、モリスの結婚は、まことにケルト的自然から生み出された芸術を模倣しているかのようである。しかしモリスは、その模倣によつて芸術の秘密を得て、自分の人生という装飾芸術をそこからこそ築きあげていったように思える。それは、どのようにしてかといふと、同じ森の生命すべてを存分に引き立て、自らも濃密に輝き、人類の歴史を含んだ自然への崇敬を形にしていくことである。そのような気高い王者の所行こそ、モリスが「建築」と呼び「装飾」と呼び慣らわしていたものだろう。王者の伝記を読み終えた味わいがした。

（十文字学園女子短期大学）

緑蔭図書紹介

あれからもう五年の歳月が流れたとは思えないことである。笠原のじさがたくさんのもかしをわが家で語つてくれたことが。

むかしばなしに興味をもつた私たち仲間の依頼で、雪のゆるみかけた越後、長岡から、餅を土産に気さくに出かけて来てくれた。少し腰を曲げたまま、細身の体を軽やかに運び、「おれ、無口でね」と、喉のかすれをかばいながら、むかしをきかせてくれた。かたり口は、餅のうまさと同じに、やさしく飾らぬ品のよさで、むかしを引き立たせる。

当時、わが家では、十五歳の息子が父親に抗いあえいでいた頃であったが、「むかあしね、あつたてんだがね」と、食後さりげなくはじめたじさのむかしは、息子の心を引きつけてしまったようであった。

おれが生まれる前、腹の中にいたとき、母親からきいたはなしをおぼえている。姉さんたちに、毎夜のようきかしてたんじやねえろうか、アッハハハ。おれ

がなんでそんげに話が好きになつたのかと、自分でもふしぎでときどき考えてみたりしるんだ。――
母の胎で丸くなつて体中で聞いていたに違いない、そして、母の性質たまが遺伝したに違いない。

むかしをしるとき、目に浮かぶのは、そのはなしをしてくれた母親の、ちょっとした仕種、声の調子とか、又、おせんべいの中に、豆の炒つたのが入つているのを見ても、『へびもこと豆炒り』の話を思い出したりすんだ。母親は豆を炒りながら、「帶とけ、帶とけ」とかいうてるの。うん、きっと、ふが割れて豆に筋が入る。あれが「帶」といた」とかいうんだね。母親は、いとこ煮るために「里芋てやな、これは百姓とおんなじみの着てるんだで」「栗は大尽だいじんだよ、イガ着て皮着て、シブまで着て、重ね着してるんだ、お金持ちだよ。生姜てやな、礼儀正しくて袴はいてるんだ」

むかしをしてくれた母の姿、声が、そのまま、じさにむかしをさせる。

ピピラピー

て鳴くがんだと。――

細く透明な声で、ひとりが腹のなかにとびこんで鳴くのを、いとしげにくり返し歌つてくれた。

おれ、これは恋愛のはなしでねえかと思っているよ。――

おれは『ブツ』だとか『海行』う、川行』う』『さば売りどん』『うそつきサン』『鳥のみじき』なんかが好きで、母親にせがんで何回も聞かしてもらうたけどさ、そういう話以外は、たいてい一回きりしか聞いてないんだよね。きょうだいみんな語れないんです。おれだけに母親の話が“遺伝”したみたいなものだね。

――そこで『鳥のみじき』がはじまつた。

むかしあしね、じさが山しことに行つたと。

……見たこともねえきれえな鳥が、ぶあぶあてとん

できてとまつたと。

「じじい、じじい。だんぐれ、だんぐれ」て、

その鳥がいうだと。

……

あやちゅうちゅう こゆちゅうちゅう

錦さばさば こよの盆 もつてまいりましょう

十八の頃、食品問屋に奉公していたの。二・二六事件の大雪の翌々日、荷をリヤカーにのせ、自転車で引っぱったんだが、あれがいまでも忘れられない

緑蔭図書紹介

だ。雪がいっぱい、もう動かんないのよ。それで
も、どうでも武藏境^{むさしさか}の駅前の店へ行けってね。片道
七里もあるんだよね。築地を出て、日比谷公園を抜け

外務省、国会議事堂、四谷見附、新宿、そして、武藏

境まで。青梅街道を歩きながら、東京天文台の姿が見
えたのが目の底に焼きついている。畠のまん中の丘の
上にぼづんとたつてたんだ。――

わが家はその天文台の構内の宿舎、じさに泊つてい
ただいたわけだが、半世紀前のじさの感慨も、はやむ
かしであつた。

火の玉、ひとだま、キツネのだまし、神かくしがれ
た子を呼びもどす時のこと、と、ふしげもたくさん
あつた、それも

まあ、この電気が入るようになつてから、こういう
ふしげなことはなくなつてきたんじやねえろうか。

むかしの間にはさまれる思い出ばなしは、辺々まで

鮮やかな記憶と、無駄のない、そのくせ濃やかな描写
で、快い。

*

語り手と聞き手が組み合わせになつて、むかしは成
立する。そして時が経ち、それが熟成されていったも
のだけが語り手になる。

語り手の中でむかしは醸酵していき、聞き手を得て
再生する。

じさは母の腹の中で、かたわらで、あたかも自らが
体験したかのように感じつつ(=共感)、むかしをき
いた、あるものはくり返し、ある時は一回限り。

他の同胞には、その母の遺伝はなく、じさだけで
あつたということは、最も、というより、じさだけ
が、それを深く共感し得て、しかもそれを身の内に醸
酵させ得たのである。

*

この著書は、笠原のじさの語ったむかしを、全くそのまま、活字にしたものであることは、一見して私にはわかり得た。厚い本を手にとり、パラパラとめくつてみると、いずこのページからも、じさの声が、耳にとどく。そして、じさの持つむかしの深さに感嘆する。編者の熱い思いがじさのむかしをていねいに再生

させたに違ひなく、じさを知る私には懐しくうれしい。
越後の雪の夜にひそやかに語られたむかしが、わが息子の中に伝えられたろうか。そして私の語ったむかしが…。息子は、この春、関西の学府に飛び立ち、二度目のたよりに「時に、つらいが快い」とあつた。
(かつこう文庫主宰・駒沢女子短大)

『フェミニズム論争』 江原由美子 編 (勁草書房)

『わかりたいあなたのための フェミニズム・入門』 (「別冊宝島」 85)

『アグネス論争を読む』 アグネス論争を楽しむ会 編 (JICC出版局)

『男がさばくアグネス論争』 小浜逸郎 著 (大和書房)

『男も女も(半分)〉イズム』 男も女も育児時間を!連絡会編 (学陽書房)

『子育て みんなすきなようにやればいい』 山田真 著（太郎次郎社）
『男の家庭科先生』 福田三津夫・緑 著（冬樹社）

宮坂 寿子

かつて、と言つてもそう昔ではない学部生時代に、「フェミニスト」とは、レディーファーストを重んじる優しい男性のことと教わつたことを今でも思い出すが、この私の経験からしても、「フェミニスト」という言葉ほどその使われ方が急速に変化した語も少ないのではないか。今日的分脈で「フェミニスト」もしくは「フェミニズム」という言葉が市民権を得たのは、ここ四、五年のことのようだ。ただ、この言葉がマスコミでもてはやされているほどには、その内実の理解は進んでいるわけではないし、またこの頃のマスコミの商業主義的風潮のもとで、「なんか特別の女たちのもの」という反発すら、男性のみならず女性たちの間に生まれてきていることも否めない。

ここでしつかり受け止めたいことは、この書の産みの根拠となつた江原氏の問題意識、すなわち、「日本のフェミニズム論は、いまだ自己の歴史を持つに至っていない」が、それは諸説の評価や解釈が「まだ決し

て十分ではない」からだという問題提起である。「論じ残すことや偏った評価がフェミニズム論を損うのではない。それらを恐れて評価や解釈をしないで、ことが、フェミニズムの論の全体性の確立を妨げるのだ。」

まず第一章「フェミニズムの70年代と80年代」では、江原氏が「ある時代においてもっとも影響力がある発言や主張をした論客の移り変わり」（氏はそれを〈主体の交替〉と呼ぶ）に着目して、時期区分を行い、各時期の論点、および各時間の関係性を個別に論じている。そしてその整理に基づき指摘された論じ残された問題が、90年代への展望を拓くために、第二章「家父長制をめぐって」以下、「〈近代家族幻想〉からの解放をめざして」「エコロジカル・フェミニズム論争は終わつたか」「フェミニズムと科学技術」「クリステヴァ理論の可能性」という構成で展開されていく。

本書が、硬派でとつつきにくく感じられる方に

は、「わかりたいあなたのための フェミニズム・入門」（別冊宝島八五）が手頃かもしれない。決して軟派ではないが、読み物風仕立てで、わかりやすく、おもしろい文章で書かれている。しかも単に手頃というだけではなく、『フェミニズム論争』では扱われていな、明治時代以後の日本のフェミニズムの歴史や世界各との動向まで、盛り沢山の情報を提供してくれる。ところで、『フェミニズム・入門』の一執筆者である金井淑子氏によれば、80年代には、ラディカル・フェミニズム対エコロジカル・フェミニズムの論争、「女性の労働市場からの総撤退」をめぐる論争、「アグネスの子連れ出勤」をめぐる論争という、三つの特筆すべき論争があつたといふ。この中で、最も広い据野をもち身近に感じられたのが「子連れ出勤論争」であつた（「アグネス論争」はきわめて多様な内容を含むものであったが、上野千鶴子氏の朝日新聞紙上への投稿により子連れ出勤論争へと「意図的」にすりかえられた）。

この論争の直接の資料は、アグネス論争を楽しむ会（編）『アグネス論争を読む』に収められている。また「アグネス論争」の全体の構図に関しては、小浜逸郎『男がさばくアグネス論争』に詳細な解説が施されている。

ここで問題のネックとなつたのが、やはり「母性」観の差異であった。この論争に限らず、女性について

皮肉にも、「母親役割に限定」されたということ自体が、人々の「母性」への関心の高まりの反映に他ならないということを証明している。実際、論争への参入者の一般化とともに「母性」強調派が優勢に転じたのは、予想される結果であったといえども、フェミニズムの前に立ちはだかる厚い壁をみせつけられたこととなつた。

論じる場合、「母性」というものをどう捉えるかといふことは絶対避けて通れない踏み絵である。日本の土壤としての母性主義ということでしばしばフェミニズムから攻撃を受ける「母性」であるが、平塚らいてう以後の日本のフェミニズム論は、基本的に、この「母性」概念を対立軸に展開されてきたのであり、現在もその構造は不变である。

いざれにせよ、この論争は、様々な母性観、職業観、現実の選択肢等の有無を反映して、「80年代における女性たちの葛藤をあますところなく呈示」（江原）したのであり、最近のフェミニスト及びその周辺の関心事を、しかも本音で知るための格好の素材を提供してくれたのである。

またこの論争時においては、男性の発言の少なさもしばしばやり玉に挙げられたりしたが、その後、現在までの特徴として、子育てをめぐる男性側からの声の増加を挙げることができようか。

この論争は確かに「古くからある家庭重視論を、母親役割に限定して、しかも働きながら子育てする立場において展開する形を提起し、分岐点の位置を大幅に働く側に移した」（江原）という新局面を拓いたが、

「男も女も育児時間を！連絡会」（編）『男も女も

「半分こ」イズム 第一部 「職場ゲリラたちからの報告書」では、会社や同僚の圧力にも屈せず仕事の仕方を変え、子育てにもかかわろうとする五人の男性の奮闘ぶりが紹介されている。また、福田三津夫・緑「男の家庭科先生——福田さん家の日常生活術」は、日本でも数少ない男性の家庭科専任教師が、「男性も家事の分担」と呼びかけるに至った自らの変化を綴る体験談である。『子育て みんなすきなようにやればいい』の著者山田真也医師の傍ら、子どもが通う共同保育所の保父をも経験した特異な経歴を持ち、診療所での親子とのかかわりの中から「男ももつと子育てを」を語る。

これらの本の出版が即、現実の男性の変化を示すものでないことは言うまでもないが、フェミニズムが提起してきた、性別役割分業の流動化という課題を、一部の男性といえども、自らの体験にひきつけて呼びかける人々の登場は、時代の流れを感じさせるものである。

「日常的現実の中の些細な“そぐわなさ”や“居心地の悪さ”的感覚……その奇妙なズレの感覚が、わたし一人ではなく、かなり多くの女たちに意識的、無意識的に共有されていると気づいたときに、わたしのフェミニズムが始まる。」——これは、アグネスの子連れ出勤論争でも注目された「有名人フェミニスト」(江原)の一人とされる落合恵美子氏の言葉である。このような素朴な「ズレの感覚」は、特別視された一部の女性だけでなく、女性、男性を問わず人間なら誰しも日常生活の中で感じるのでないだろうか。

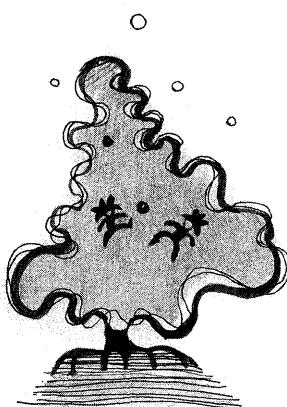
私は、「フェミニズム」が揶揄や嘲笑の対象としてではなく、人間一人一人がよりよく生きるために問題提起として、より多くの人々に共有されることを願っている。性別役割分業の見直しは、何も子育てに限つた問題ではなく、既に迎えつつある高齢化社会においても不可避の視点になるに違いない。

(お茶の水女子大学大学院)

言語発達に関与する要因

—口蓋裂を通して

村上 敏子



口蓋裂児の言語指導においては、声や発音の異常等、語音产生上の問題についての対応が中心となる。これらの問題は、適切な時期に適切な手立てを講じれば完全に解消しうるので、後にハンディキャップを残したり、問題を長びかせたりしないように、これらの問題の解決のために総力を挙げる必要があることは言うまでもない。しかし、それと同時に声や発音の問題は、人間のコミュニケーション活動の一部に過ぎないことも念頭に置く必要があろう。部分にこだわる余りに、全体を歪めることのないように注意する必要がある。

私は、口蓋裂児の言語発達について知見を得、言語環

境の調整に生かすために、二つの調査を行つた。一つは

初期の言語発達の指標である始語の出現期についての調査であり、もう一つは幼児期後期に属する四・五歳児への WPPSI 知能診断検査の実施である。

一、始語の出現期についての調査

口蓋裂児の初期の言語発達は、正常児と比べて遅れる、と一般に言われている。しかし、全体的な発達は順調であることを前提条件として調査対象を選び、多数の口蓋裂児の始語の出現期について、実際に調査した研究報告は少ない。口蓋裂児の発達の経過を見ていると、初期の言語発達は、口蓋裂だけの場合と唇裂をも伴う場合とでは、差があるように思われる。また言語発達には、性差があると言われているので、このことも考慮した上で、口蓋裂児の始語の出現期について検討した。

始語が出現した時期については、経過観察のための面接時に、母親等の家族から情報を得た。反復喃語を始語と混同することがあるので、始語内容と特定の事物を差して使われたかを確認した。

結果は、口蓋裂のみを伴った男児群、同女児群、口蓋裂に唇裂を伴った男児群、同女児群の四群に分け、t 検定にて裂型による差を検討した。

〈方法〉

調査対象（表1）は、私どもが乳幼児期より一貫して発達の経過を追い、最終面接時に満三歳以上であり、知

表1 始語期の調査対象

計	女児	男児	唇裂を伴う		計
			三〇名	五名	
五九名	二九名	一五名	五名	三五名	
	一一〇名	七九名	四四名		

〈結果〉

統計的に有意な差は出なかつたが、始語の出現期の平均は、口蓋裂のみの女兒、唇裂を伴う口蓋裂女兒、口蓋裂のみの男児、唇裂を伴う口蓋裂男児の順に早かつた（表2）。つまり、同性であれば、口蓋裂のみの方が唇裂を伴う場合よりも始語の出現期の平均は早かつた。

二、WPPSI 知能診断検査成績の非口蓋裂児との比較

口蓋裂児の初期の言語発達は、遅れるが加齢とともに追いしていくと言われている。しかし、実際に多数例で縦断的に調査をした研究報告は、私が調べ得た範囲では、私どもの学会発表以外には見当たらない。また、多くの口蓋裂の子ども達と接していて、潜在的な知能は正常であるという印象を受けるにもかかわらず、ことばによるコミュニケーション能力が低いと思われることが多々ある。そこで、言語性検査と動作性検査とで構成されているWPPSI 知能診断検査を、四歳台・五歳台の口蓋裂児と非口蓋裂児に実施し、その結果を検討した。

表2 始語期

平均	範囲	口蓋裂を伴う		口蓋裂のみ		口蓋裂のみ の男児	口蓋裂のみ の女兒
		口蓋裂男児	口蓋裂女兒	口蓋裂のみ	計		
二・八か月	二・二か月	八	八	八	八	九	九
二・八か月	二・二か月	一六か月	一五か月	一八か月	一八か月	一二二か月	一二二か月
二・八か月	二・四か月						
二・八か月	二・〇・八か月						

表3 調査対象四歳台

（小数第二位以下切り捨て）

表4 調査対象五歳台

計	男女	男女	口蓋裂を伴う	口蓋裂のみ		非口蓋裂児
				男児	女児	
二二名	男女	男女	口蓋裂を伴う	二二名	二二名	七名
七名	女児	七名	口蓋裂のみ	○名	○名	七名
一九名	男児	七名	計	七名	一二名	七名
一七名	計	八名	非口蓋裂児	九名	一四名	一四名

〔方法〕

調査対象は、始語期の調査対象79名中の45名および非口蓋裂児31名（表3・表4）であった。

結果の検討は、唇裂を伴う口蓋裂群と口蓋裂のみの群との比較、およびこれらの一群と非口蓋裂群との比較で、言語性知能指数の差の有無について行つた。統計上の差の検討は、*t*検定によつた。

〔結果〕

表5 WPPSI-知能診断検査の平均値(四歳台)

		言語性知能指数	動作性知能指数
	唇裂を伴う口蓋裂群	八八・三	一〇四・〇
同	男児群	八二・七	一〇七・七
同	女児群	九三・四	一〇〇・六
口蓋裂のみの女児群		九五・三	
一〇五・七	一〇四・一	九九・九	一〇〇・六
一〇四・一	九四・一	一〇四・一	一〇〇・六
同	男児群	九五・三	一〇〇・六
同	女児群	九九・九	一〇〇・六
非口蓋裂群		九五・三	一〇〇・六
同	男児群	九四・一	一〇四・一
同	女児群	九三・六	一〇四・一

(小数点第二位以下切り捨て)

表6 WPPSI-知能診断検査の平均値(五歳台)

		言語性知能指数	動作性知能指数
	唇裂を伴う口蓋裂群	八一・二	一〇二・七
同	男児群	八五・八	一一〇・一
同	女児群	七四・八	九一・四
口蓋裂のみの女児群		九二・一	九一・四
九三・六	九二・一	九一・四	九一・四
一〇三・八	九二・一	九一・四	九一・四
同	男児群	九八・五	九一・四
非口蓋裂群		九八・五	九一・四
九三・六	九八・五	九一・四	九一・四
一〇〇・一	九八・五	九一・四	九一・四

(小数点第二位以下切り捨て)

四歳台の子どもの言語性知能指数は、非口蓋裂女児群、同男児群、口蓋裂のみの女児群、唇裂を伴う口蓋裂の順位に高かつた。これは動作性知能指数の順位とは一致していない（表5）。統計的に差を検討すると、口蓋裂群と非口蓋裂群との比較で、言語性知能指数にう口蓋裂群と非口蓋裂群との比較で、言語性知能指数に差がある傾向が認められた（動作性知能指数については差がある傾向はなかつた）以外は統計的な差はなかつた。

た。

五歳台については、言語性知能指数は、非口蓋裂男児群、同女児群、口蓋裂のみの女児群、唇裂を伴う口蓋裂男児群、同女児群の順に高かった。やはり動作性知能指数の順位とは一致していなかった（表6）。

統計的な差を検討すると、口蓋裂群と非口蓋裂群との比較、唇裂を伴う口蓋裂群と非口蓋裂群との比較、唇裂を伴う口蓋裂男児群と非口蓋裂男児群との比較で、言語性知能指数は、後者が前者より有意に高いと言えた。また、唇裂を伴う口蓋裂女児群に比べて、口蓋裂のみの女児群の方が、言語性知能指数は高い傾向にあると言えた。動作性知能指数については、口蓋裂児内での差以外には認められなかつた。

三、まとめ

以上二つの調査結果から、唇裂を伴う口蓋裂児の言語発達は、口蓋裂のみの子どもより遅れることが示唆された。また、WPPSI 知能診断検査の結果より、口蓋裂児

の言語能力は、非口蓋裂児と比較すると幼児期後期においても劣っていることも示唆された。

それが臨床研究の課題である。

私が行った二つの調査によつて、裂が重度な程、言語発達が遅れることが確認された。また、Fox⁽¹⁾らは、広く使用されている三種類の発達検査を三歳未満児に実施し、その結果、裂が重度な被験児ほど成績が劣っていたと報告している。しかし、口蓋裂の問題は、発語器官の形態の問題にとどまらないようと思われる。実際に口蓋裂の子どもの発達の経過を見ていると、大多数の子どもが、幼少の頃から対人関係のもちかたに何らかの問題をかかえているという印象を受ける。特に、ことばでのコミュニケーションに自信のない態度を示すことが目立つ。WPPSI 知能診断検査において、動作性知能指数には差がないにもかかわらず、言語性知能指数が、口蓋裂児群の方が非口蓋裂群よりも低く、かつ、口蓋裂児児も、裂が重度なほど低かったのは、単に言語能力が低い

というだけではなく、課題場面への適応の悪さによるのではないかと思われる。

幼児期の言語発達においては、親を中心とした養育者からの言語刺激と強化が必要である。Morris⁽²⁾は、生後3か月頃は幼児の言語発達において重要な時期であると述べ、その時期に入院生活を送ることの影響の大きさを指摘している。唇裂を伴う口蓋裂児の大多数が、この時期に口蓋形成術を受けるために入院する。また Estrem⁽³⁾らは、口蓋裂児が言語発達の初期の段階で表出す語彙内容、およびそれらの語の語頭音の種類が、調音点や調音方法から見て正常児の場合と異なっていることに注目し、子どもが表出す語は子どもの音韻产生能力に規定される、と述べている。そうであれば、口蓋裂児の喃語等の音声の表出を語音として親が容認しにくく、子どもの発声・発語に対する強化刺激を与える機会が乏しくなる。同様の観点から、Spristersbach⁽⁴⁾ らや Philips⁽⁵⁾ らは、口蓋裂児の言語発達の遅れには、子どもの発したことは、口蓋裂児の言語発達の遅れには、子どもの発したことは、

いる。これは、口蓋裂児と非口蓋裂児との差を説明するだけでなく、唇裂を伴う口蓋裂群と口蓋裂のみの群との差をも説明する。唇裂を伴う口蓋裂は、より裂が軽度の口蓋裂のみの場合に比べて、產生する語音の歪みが大きく、語音としてより容認し難いことから、強化刺激を受ける機会も更に少なくなりうる。しかしそれ以前に、唇裂という外から見える容貌の問題が親に与える心理的なショックが、子どもへの働きかけを少なくする最大の要因であることも少なくないのではないかと推測する。

私の現在の職場では、口蓋裂を持つ子どもが生まれ新生児センターに入院すると、家族へのオリエンテーションが開始されるが、最初の段階では、家族的心理的な受け入れが困難な場合が少なくない。口唇形成術が終わるまで新生児センターに入院させておきたいという家族からの申し出は、稀なことではない。また、口唇の手術が終わるまで外へはほとんど連れて出なかつた、というのは一般的である。

確かに口蓋裂に伴う言語障害は、基本的には発語器官

の形態に発するが、適切な時期におこなうとばの刺激

と、子供が発した声やリハビリに対する強化刺激が不十分であるだけ、親に心理的な不安や葛藤があるたゞく等のために、単に発音のみの問題にとどまらず、言語開発の能力の問題、対人関係の問題にまで及んでしまって、多くの子供が多くの口蓋裂を持つ子供が生

あれば、できる限り早期に家族のカウンセラーや開始やないふの重要性は、繰り返し思ふ起りや必要がある。

家族に受け入れられ、安定した気持で、じぶねで、はじめて子供は口を表現する豊かな力を培つてじきぬのだ、と改めて考えやせらるだ。

されば、口蓋裂を持って生まれて来た子供達だけではなく、かぐやの子供達はおこなわれぬが、私は、いのりんを口蓋裂の子供達へ接する中で教えた。

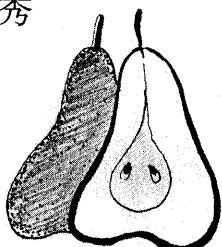
文献

- (1) Fox, D. et al, Selected Developmental Factors of Cleft Palate Children between Two and Thirty-three Months of Age, *Cleft Palate Journal* Vol. 15, No. 3, 239-245, 1978.
- (2) Morris, H. L. : Etiological Bases for Speech Programs, *Cleft Palate and Communication*, edited by D. C. Spriestersbach and D. Sherman, 61-118, Academic Press, New York and London, 1968.
- (3) Estrem T. et al, Early Speech Production of Children with Cleft Palate, *Journal of Speech and Hearing Research*, Vol. 32, 12-23, 1989.
- (4) Spriestersbach, D. C. et al : Language Skills in Children with Cleft Palates. *Journal of Speech and Hearing Research*, Vol 1, No. 3, 279-285, 1958.
- (5) Philips, B. J. et al : Language Skills of Preschool Cleft Palate Children. *Cleft Palate Journal*, 6, 108-119, 1969.

心が育つということ その(2)

幼児の持つ「内一外」意識の変容をめぐって

豊田 一秀



(4) マージナルなもの、その1 Bの指しゃぶりと、毛布への愛着をめぐって

Bは、生後三ヶ月ぐらいから、指しゃぶりを始めた。

そして、一歳を過ぎてから右手の親指をしゃぶる時、同時に左手には愛用の毛布を握っていなければならなくな。る。どんな時に指しゃぶりが始まるか考えてみると、眠い時、疲れている時、不機嫌な時、悲しい時、病気の時などである。これらのことからわかるように、Bは自分が精神的、肉体的に危機的な状態に追い込まれたとき、指しゃぶりと毛布を必要とする。そして、この行為によつて自分を整え、安定させる。自らが安定すると、この行為は必要なくなる訳である。

Bは、三歳六ヶ月を過ぎた今日、指をしゃぶり、毛布

Bにとっての順調な時と危機的な時を想定した場合、危機的な時に身を置いた自分を、守り、整え、その状態を順調な時の状態へ、修正する力を持つているものが、この指しゃぶりと毛布への愛撫なのである。眠い時を例にあげて考えてみるなら、元気な時にはそれを必要とはせず、眠くなると必要となり、眠り込んでしまふとまた必要でなくなるというパターンをとる。この場合、それぞれの「時」は、その子どもにとっての心理的な「状況」と見てもよいであろう、そうであるとすれば、この状況を、その時に臨んだBの内的な世界と置き換えてもよいであろう。

状態に遭遇しても、それを危機的な状態とは感じなくなってきた。

いずれにしても、この減少傾向は本人の努力や訓練、学習によるものではない。あえて言うならば、外在的な物質であった毛布を、Bが内的なものとして、心の中に定着させつつある結果であると言つてもよいであろう。そして実際場面において、以前よりも危機的な場面を、危機的な場面として意識することが少なくなってきたのである。



▲ Bの指しゃぶり

を愛撫する頻度が少なくなってきた。前述の考え方について考へるならば、以下のような解釈が可能である。そこで、私が興味を引かれるのは、Bにとって、なぜ指しゃぶりと毛布への愛撫が、相互不可欠なものとして、同時に行われなくてはいけないのか、という事である。このような二種類の組み合わせを必要とする例は、他にもよく見られることである。例えば、下くちびるを吸いつつ、片手は母のまぶたに触れる、下くちびるを吸いつつ、片手は服の角を指の腹で触れる、といった例があげられる。

(1) それらがなくとも、危機的状態を耐え、乗り越えられるようになってきている。

(2) 以前であつたら、それらを必要としたような危機的

これらの間に共通なことは、自分の身体（指、唇）を

使用しつつも、一方では自分以外の物（毛布、服、母親のまぶた）も同時に不可欠であるという点である。もしも、両方共に自分の身体で済ませることができるなら、より容易に、いつでも、どこでも、この行為を行え、都合がよさそうなものであろうに、と私には思えるのだが。事実、Bは指吸いが必要となつた時、毛布なしで指を吸うこととはできずに、ヒステリックに「毛布は？毛布は！」とたずね続け、辺りを捜し回る。

私は、ここに、愛着対象が同時に二つあり、それらが相互不可欠であることの意味を感じる。一方で自分を確かめながら、同時に他方では、外在する物を自分でコントロールしつつ、自分の一部に取り込もうとする姿勢を、私はそこを見るのである。

ボウルビィ（一九八〇）は、その著書の中で、指しゃぶりと毛布への愛着について述べている。彼は、指しゃぶりを非食事的吸引、毛布への愛着は無生物への愛着行動と位置付けた上で、それらは、母親（愛着人物）に対する「代理対象」であるとしている。しかし、ここで注

意しなくてはならないことは、それを母親の愛情不足による、子どもの欲求不満の現れである、と一面的に彼は捉えているのではないということである。むしろ指しゃぶりと毛布への愛着も、母親への愛着そのものと同じよう、あらかじめ愛着対象を求めるように、子どものなかにプログラムされている結果であるとボウルビィは考える。この事は、例えば、子どもの指しゃぶりが、実際に乳首を吸う以前の胎児にすでに見られることからもうなづけることである。この点についてボウルビィは、同じ本の中で次のように語っている。「母親に対する、子どもの結びつきは、母親をある結果をもたらす対象とみなして接近しようとする行動システムの一つの所産である。これを我田引水的に解釈するならば、幼児は外界を、各人の内的な世界へ取り込んで行こうとする潜在的なプログラムを持つていると言ふこともできよう。（ボウルビィは、愛着行動に関して、比較行動学の研究を援用しつつ、従来支配的であった二次的動因説に対し、愛着行動制御説を主張している。）

(5) マージナルなもの、その2 Bとドロだんご

〈事例1—4〉

少し早めに保育園に子どもを迎えて行く。昼寝からさめたばかりのBは、私をみつけてビックリ、喜んで、膝の間に割り込んで抱きついて来る。園の流れとしては、昼寝の後はフトンをかたずけたり、おやつを食べたり、帰りの集まりがあつたりするのだが、それにもかかわらず、Bはそれ以後、保育園の流れには一切乗らず、先生の誘いかけにもまったく従わない。そして私にただただ、だっこを求め離れない。保育の場に私がいても、また、いなくても、同じ振舞いをBがすることを望む私としては、このBの強く依存的になつてゐる状態は受け入れ難く、私はイライラさせられる。私がイライラしていることが、すぐにBにも伝わり、Bをさらに強く私にしがみつかせ、それが又私をイラつかせる、という悪循環がそこに生じる。ついにBは大声で泣き始める。私はクラスへの遠慮からBを抱いて、誰もいない遊戯室へ連れ出す、Bはそこで抱かれたまま園庭を見つ、ひとしきり大泣きする。しばらくして泣きやむ

と、Bは自分から降りて、素足のまま園庭の大きなスベリ台の下に行く。そして半乾きになつているドロの塊を、いくつか手にして来る。(Aに聞く所によると、昼間、五歳児がそこでドロ遊びをした時に、Bも参加して楽しいひと時を持つたそうである)私は、丁度持っていたビニールの袋に、それらを入れて、手に持たせてやる。Bはそれを持つと自分から部屋に戻り、あとはクラスの流れに従い、先生に挨拶をして降園する。(Y保育園)

Bは、保育園生活の中に自分を添わせていたのだが、思いがけず、早く迎えに来た父親を見て、ホッとした瞬間に、自分の置かれている場を、「外なる」場と感じてしまつたのだろう。そのように、Bの気持ちが変化すると、それまで慣れ親しんでいた周囲は、瞬時に不安な世界へとその「みえ方」を変貌させ、その不安がBを私にしがみつかせる。しかし、自分を支えてほしいと、その時感じた唯一の相手である父親は、いつになくよそよそしく、安心感を与えてくれない。Bにしてみれば、急に

不安定な世界に放り出された不安と、支えてほしい相手に受け止められないという、二重のショックがBをさらに動搖させたのだろう。その混乱したBの世界を統合させたのは、泣くという一つのカタルシスと、もう一つ

は、「間」としての時間であり、さらには、昼間、保育園で楽しく遊べた事の象徴である、半乾きのドロだんごを、手を持つということであつたと言えよう。私の出現によつて、急に外なる世界になつてしまつたBにとっての保育園という場を、再び以前の状態に戻すためには、あの自己充実した時のシンボルであるドロだんごを、Bは手に持ち直す必要があつたのだろう。その意味で、このドロだんごは、Bにとって、二つの世界を統合する架け橋——マージナルな物質であつたのだと思う。

また興味深いことは、帰る時にBが手にしているドロだんごを見て、その活動を共にしたという二、三人の年長組の子どもが、一様にそれをほしがつたという事である。大きい子どもにとつては、三歳のB程にはそれ家庭に持ち帰る必要はなかつたのであろうが、程度の差こ

それ、やはりその物が、家に持つて帰りたい気持ちを起させる「何か」であつたことにおいて、年の差を超えた共通な思いがそこにあるたのだろう。

園で作ったものを家に持ち帰りたがる子どもの姿は、私の知るいくつかの保育現場でも、よく見られる事である。特に印象深いのは、展覧会や作品展に備えて、教師が計画を立て、指導して作った作品を、作ったその日に、子どもが家に持ち帰りたがることである。教師としては、展覧会のその日まで、作品をためておく必要があるので、親に対する展覧会という思いも含めて、作品を持って帰らねたくないという気持ちが働く。一方、子どもは、教師の熱気（エネルギー）がそこに注がれ、また自分としても、一日の多くの時を費やしてできた自分の分身である作品を、家に連れて帰りたくて仕方がないのだ。作品を園に置いておきたい教師、家に持つて帰りたい子ども、作品に対する執着という意味においては、子ども、教師の両者とも同じであつて、教師が何かを意図

すると、子どもの心が分からなくなってしまうといふ」との一例になるとも思うが、少し離れて見ると、ほほえましくもある一面である。

(6) マージナルなもの、その3 保育園の玩具を家に持

ち帰りたいB

〈事例1-5〉

定刻にAとBを保育園に迎えに行く。園庭で遊んでいるBに声をかけても、見向きもしないで遊んでいる(Bにっては、その時、私がその場に現れることが、場違いに思えてたのではないかという感じが私にはする)。私は芝生に腰を下して、のんびりと待っている。しばらくすると、Bは横にやつて来て、砂場遊び用のプラスチック製のマスを、家に持つて帰りたいと言う。見ると、マスには砂が一杯入っている。先生に聞いてみて、よいという事ならば、持ち帰つてもよいのではないかと、私は答える。しかし、Bは自分で先生の所に聞きに行かれず、モジモジしている。そこで私は、Bと連れだつて、先生の所にお願いに行く。明

日また保育園に持つて来るのなら持ち帰つてよい、といふ返事をいたぐと、Bはニッコリうなづいて、砂の一杯入ったマスを手に持つて、素直に車に乗り込む。家に着くと、保育園ではあんなに大切なマスだったのに、もう見向きもしない。(Y保育園)

この日は、Bにとつてきっと、比較的満足のいった一日であったのではないだろうか。迎えに行つた私が、いつときではあれ、異なつた世界の人間のようにBには写り、私が無視されたことからもこの事は察せられる。保育園から帰るにあたつて、その世界の象徴であつた砂の一杯入ったマスが、家庭というもう一つの世界に戻るために、Bにとつて必要な「物」であつたのかもしれない。そしてこの場合、それがマス、すなわち物を中心蓄えるものであり、しかも、それは砂で満たされたマスであった。この事からも、この日のBの満足感、充足感といったものを、私は感じたのである。また、そのマスを家に持つて帰りたいと先生にまだ伝えられないBに代

わって、私が先生にお願いした事も、Bにとつてはよかつたことと思う。二つの世界の代表者である親と教師が、親しく言葉を交わし、自分の願いを満たしてくれようとしている。このような会話を近くで聞くことは、Bにとつての二つの世界を縮めるのに役立つことと思う。

んでいた物を、そのまま保育園に持つて行きたがることが多いようだ。保育園では、登園当初、オモチャをしつかり握っていて離さないが、何かの遊びに没頭できた時は、その存在を忘れてしまい、思い出した時になって大騒ぎで捜している。そして、帰りにはまたしっかりと、それを手にしている。(家庭とY保育園)

(7) マージナルなもの、その4 家の玩具を保育園に

持つて行きたがるB

〈事例1—6〉

八月になつてから十月初旬の今日まで、Bは保育園に行く時に、何かオモチャを持って行きたがる事が続いている。

それらは、毎日、必ずしも同じ物であるとは限らない。今

までに持つて行つたものは、ミニカー、金属製合体ロボットの一部、プラスチックのブロック、ウルトラマン人形、ピストルなどである。同じものがしばらく続く時もあれば、しばらく日が経つた後、再び、以前の物を選ぶこともある。その日、その日に、なぜそのオモチャが選ばれたかを見ると、登園の直前、すなわち朝食の後のひととき遊

こうして考えてみると、Bにとつて、オモチャを保育園に持つて行くことは、何か大きな意味があるようだ。

家庭での楽しい時の象徴である気に入りのオモチャを保育園に持つて行くことで、自分を支えていると考えてもよいであろう。

しかし、ここで忘れてならない重要な点は、Bとオモチャ、二者間だけの問題ではない。Bが気に入りのオモチャを、保育園に持つて行かれる為には、Bをとりまく多くの人々の、Bに対する肯定的な配慮を必要としている。その人々とは、具体的には、先生であり、友達であり、兄弟であり、そして両親である。規則を守る、とい

う一点に重きを置く教師であったならば、オモチャを保

育園に持つて行くことなど不可能であったであろう。実

るB

（事例1—7）

際、それを禁止する一般的な理由は、いくらでもあげることができる。また保育園での友達も、Bだけがオモチャを持つて来てするい、という批判をも含めて、Bの存在を認めてくれている。とくに年上の子どもたちは、まだ赤ちゃんなのだから仕方がない、というように捉えている。この点に関しては、兄であるAも同じである。そして親である私たちは、Bがオモチャを持つて行く事で、生じるであろういろいろな不都合を予想しながらも、それを直接禁止するという事ではなしに、Bがオモチャを持つて行く必要がなくなる時が来るよう、Bを見守つている。

Bの心が少しづつ育つて行くその裏には、Bを包む人間的環境というものを、少しづつB自身が理解して行く過程があるのでと思う。

Bの心が少しづつ育つて行くその裏には、Bを包む人間的環境というものを、少しづつB自身が理解して行く過程があるのでと思う。

持つて行つたオモチャを、保育園にBが忘れて来るごとなど、それまでなかつたことである。保育中に手放すことはあつても、帰る時には先生も驚く程に思い出して、持つて帰つていた。そのBが、オモチャを保育園に

- (8) マージナルなもの、その5 家の玩具を先生に預け

置き忘れ、しかも、先生に預けてあると言つて平然としている。ここに、Bの内面の変化を見る思いがする。他の子どもに対する先生の配慮から、オモチャを帰る時まで預かっていてあげようと先生が提案する、といったような、先生からの働きかけも、当然あつた事とは思う。

しかし、Bはその提案を無理なく受け入れている。このことは、登園時、オモチャを持って行くことに、少し難色を示す母親に対して「保育園に行つたら、先生に持つていてもらうから（持つて行つて）いいでしょ！」とBが、自ら話すことからもうかがえる。

おそらく、Bにとって家庭の象徴であるオモチャを、自分ではなく、先生が持つているのであっても、まるで自分がそれを直接持つていた時のような安心感を得られるようになつて来ているのであろう。

そればかりでなく、さらに、先生にオモチャを預ける、というその事がBにとって、そのまま、自分自身を先生に委ねているような意味合いを感じさせているのではないか。保育園という場面を構成する三つの要

素である、教師、友達、物（園舎、園庭、遊具、など）に対するBの見え方が変化し始めている。そしてその裏に、常にBを支えてくださつてゐる先生方の暖かい配慮を感じる。

ここで、少し振り返つて、これまでの事例を互いに比較してみると、そこにBの内面の変化が見られ、興味深い。〈事例1-4〉においては、Bは私をみつけた瞬間に、それまでの間、身を置いていた保育園の世界が、急に外なるものと変貌してしまい、不安定な状態へ陥つてしまつた。この逆の例として、〈事例1-5〉では、迎えに來た私に対し、いつときではあるが私を無視することで、そこでの内的な世界を保とうとしている。これらに共通なことは、どちらか一方が「内」となると、同時に他方が「外」となつてしまつ一律背反の関係であり、二つの世界に距離があることを示してゐる。この点は、〈事例1-2、1-3〉のマージナルな時間からも理解されよう。

しかし、他方で、〈事例1—5〉を、〈事例1—4〉と

比較すると、〈事例1—5〉においては、言葉による気持ちの表明が、Bの行動を滑らかにしていることに気が付く。

自分の思いを口にするということは、ただ単に言語を身に付けた結果によるという訳ではなく、話せば自分の気持ちを分かってもらえるであろうという、相手に対する言葉以前の信頼を、その基礎にしていることが伺われる。

〈事例1—6〉を、〈事例1—5〉と比較すると、「手

放す」過程というものが見られるのではないかであろう。ある物（気に入りのオモチャ）を持っていなければ、自分を支えられなかつた状態から、それなしでも自分を支えられるようになつてきているBの姿が、そこに現れている。そして、それは、単に家庭と保育園という関係の中だけではなしに、〈マージナルなもの、その1〉においても見られるように、Bにとって、より中心的な対象である毛布への愛着に対しても、同様な変化を

見せて いる。

ある具体的な愛着物がなくとも、自分を支えられるようになるということは、その物を必要としなくなつたと いう事実に違はないが、私はむしろ、その物を、内面に取り込んだ結果であると捉えたい。Bはマージナルなものを、その手中から心の中に取り込むに従つて、現実の世界では、先生や友達を身近なものとし始めている。そこにBの内的な世界における「内」の広がりを、私は見るのである。（お茶の水女子大学附属幼稚園）

参考文献

- (1) Bowlby, J., 1969 "Attachment and Loss, Vol. 1 attachment" The Hogarth Press. (黒田実郎他訳一九八〇 母子関係の理論(1)愛着行動 岩崎学術出版社)
- (2) Bowlby, J., 1973 "Attachment and Loss, Vol. 2 Separation : Anxiety and Anger" The Hogarth Press.

“保育のいづみをくむ”いかがでしょ
うか。堀合先生には、本誌三月号で「現
代の幼児教育を考える」を書いていただ
きましたが、もう少し具体的に先生の保
育のお話を伺うことができたら、若い保

育者の方々の一助になるのでは、とこの
企画を考えました。誌面の都合で、お話
の前後を割愛、編集させていただきまし
たが、今の子ども達には何が一番必要な
のか、“全身の真心をこめて、体の中の
内臓までも全部使って”とおっしゃる堀
合先生の保育の心が、皆様にうまく伝わ
りましたでしょうか。

お話をすすめていく中で、子ども達か
ら「ホッちゃん」とあだ名をもらい、「す
ごくうれしいのよ」とおっしゃった先生
の笑顔がとても印象的でした。皆様のご
意見ご感想をお待ちしております。

さあ、待望の夏休みです！ そうは
いつても、母親としては、お昼の食事の
仕度をしたり、何か夏休みでなくてはで

きないような体験をさせよう、などと考
えたり…。そうのんびりと過ごせる時で
もありません。学校がある時期に一人で
静かに昼間の時間を過ごしていた分、暑
さが二倍もこたえます。

子どもの頃の夏休みは、死ぬ程暑い日
が延々と何日も続き、一日もとても長
く、あきもせず、家にいることを楽しん

でいたような記憶があるのですが…。○
○せねばならぬということは殆んどな

く、まして、仕事や雑事、時間に追われ
ることなど何もなく、自分のしたいこと
をして一日遊び、24時間がゆっくりと過
ぎていったように思います。

我が家の子ども達も、塾やおけいこ、
プールと昔の子より忙しい生活になつ
てきていますが、家をベースに行動して

いるせいか、のんびりと楽しんで過ごし
ているようです。今年は私も気持ちを切
り変えて、雑事や時間に追われず、子ども
と一緒に、楽しくのんびりと、本でも

読んで過ごすことにしましょう。(K)

幼児の教育

第八十九巻 第八号
(一九九〇年八月号)

定価四一〇円 (本体三九八円)

平成二年八月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三一一
振替口座 東京九一九六四〇

発売所 株式会社 フレーベル館

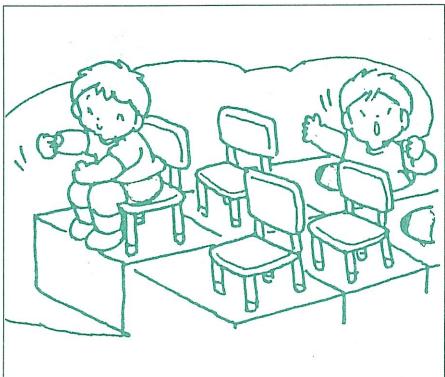
東京都千代田区神田小川町三一一
電話 ○三一二九二一七七八一

● 本誌購読のご注文は、発売所フレーベル
館にお願いいたします。

● 万一一落丁・乱丁などございましたら、
おとりかえいたします。

新教育要領が望んでいる自主性を育てる保育に必要な援助の仕方と子どもを見る目を養う保育実践書。

年齢別保育実践シリーズ〈全5巻〉



- 子どもの発達の姿が年齢別にとらえられていて自分のクラスの子どもの遊びが見えるようになる。
- 身近な保育実践事例にコメントがついていて、保育の実際とねらいとの関連性をつかむことができ明日の保育に役立つ。
- 子どもを見る目が養われ正しい援助によって子どもの遊びを生き生きしたものにすることができる。

小川博久・責任編集

A5判・1～4巻264頁、5巻276頁

定価各2,000円（本体各1,942円）

1巻 0～1歳児の遊びが育つ

編集／小川清実

人間の一生の中で最も急速にドラマチックに発達を展開する0～1歳代の子どもの姿をとらえるもの。

2巻 2歳児の遊びが育つ

編集／野本茂夫

自由に歩けるようになった2歳代の子どもがいろいろな環境とかかわりながら成長していく姿をとらえたもの。

3巻 3歳児の遊びが育つ

編集／平山許江

集団生活に入りにくい3歳代の子どもの遊びから生活習慣の自立と遊びへのレディネス。

4巻 4～5歳児の遊びが育つ

遊びの魅力－編集／河邊貴子・戸田雅美

子どもが興味をもつ遊びの魅力はどんなところにあるのか、身近な保育の中からとらえたもの。

5巻 4～5歳児の遊びが育つ

遊びと保育者－編集／河邊貴子・戸田雅美

つぎつぎと変化する子どもの遊びに保育者はどのように関わっていけばよいのかについて考える書。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館

ふしきがわかる

しぜん図鑑

●第1巻

こんちゅう

●第3巻

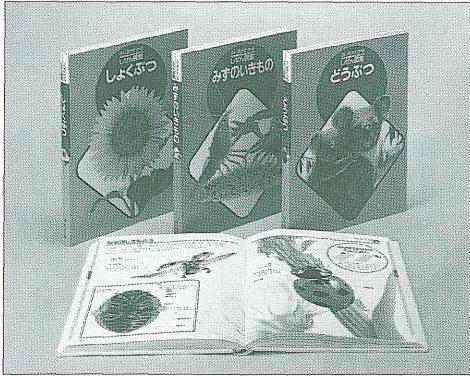
しょくぶつ

●第2巻

どうぶつ

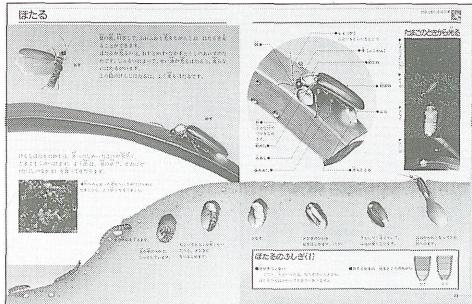
●第4巻

みずのいきもの



A4判・上製本・本文116頁
全4巻・定価6,800円(本体6,600円)
各巻定価1,700円(本体1,650円)

幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。



監修

こんちゅう
どうぶつ
しょくぶつ
みずのいきもの

東京大学名誉教授 水野丈夫

東京都多摩動物公園園長 矢島 稔

東京都井の頭自然文化園園長 増井光子

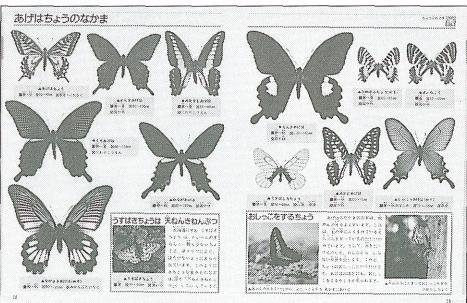
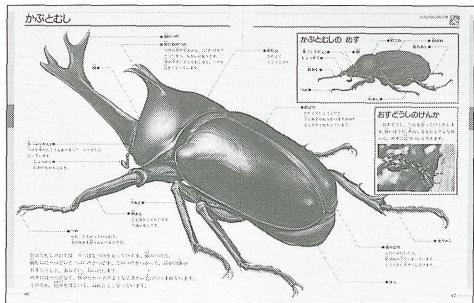
園芸研究家 浅山英一

国立科学博物館 武田正倫

新刊



●なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりあげてあります。
豊富な写真とイラストを組み合わせて構成してあります。



●スーパーAR技術のワイドな画面によって動植物への関心を高め、そのふしきさに気づいていきます。

●基本的な図鑑としての役割を十分にはたしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館